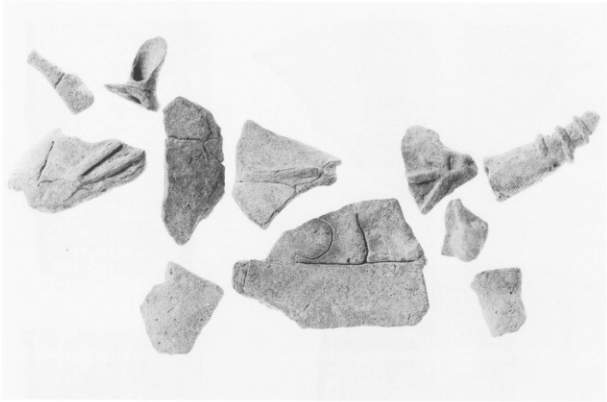


fig. 329　馬形埴輪

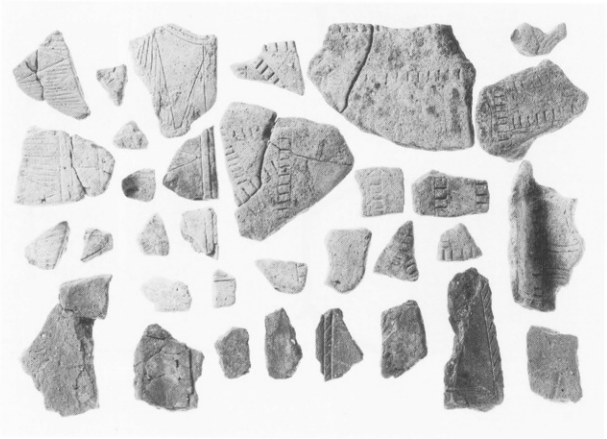
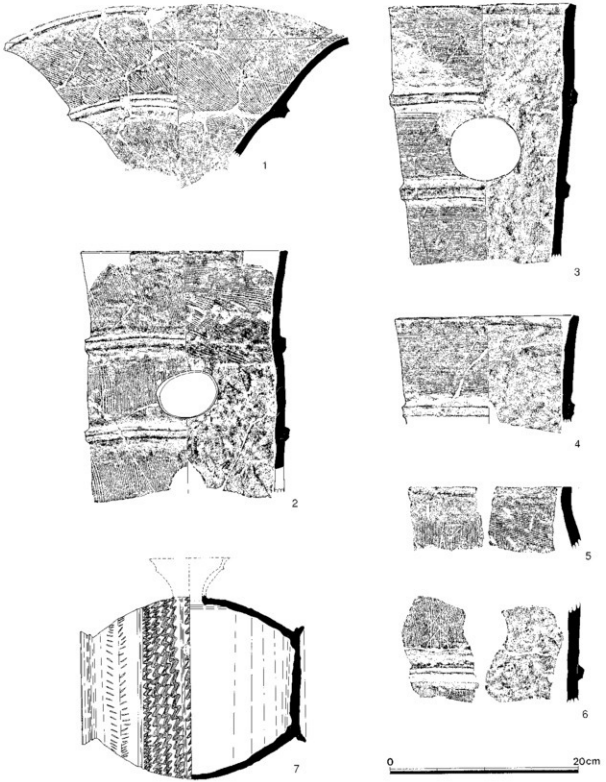


fig. 330　盾形埴輪・靫形埴輪



1．SD01　2～6．SD02

fig. 331　出土遺物実測図

ＳＫ02　調査区の北東隅部では、北東方向から流入したと考えられる灰褐色砂質シルトがみられその下層に平安時代後期に盛られたと推定される暗黄灰色粘質土が残存していた。この暗黄灰色粘質土から掘り込まれた土坑１基を検出した。

平面形は不整形な土坑である。長径1.6m、深さ20cm前後を計測し、断面形は皿状をしている。茶褐色極細砂シルトを埋土として、須恵器片が出土している。出土遺物から比定される土坑の時期は鎌倉時代前半と考えられる。

古墳の墳丘　推定される古墳の墳丘規模は、東西辺11.5m、墳丘は周溝底より計測して50cmから60cm前後残存している。

墳丘の築成は、まず水谷地区の中位段丘を形成している黄褐色粘質土を浅く掘り込んで周溝を設け、同時に黄褐色粘質土面を整形してほぼ水平にしている。その後、低位にあたる西側を中心に淡灰色極細砂シルトを盛り、次に周溝肩部分に灰黄色極細砂シルトを堤状に盛り込んでいる。さらにその上に、淡黄灰色シルトを順次積んで墳丘土としている。以上から確認できる残存墳丘の盛土の厚さは25cm前後を計測する。従って、本墳は大部分が盛土によって築成されていたと言える。なお、残存する墳丘面及び地山の黄褐色粘質土面で、内部主体の検出を慎重に試みたが主体部等の痕跡は検出されなかった。

遺物の出土状況　古墳周溝内の遺物の出土は、埴輪片がその大部分を占めている。ＳＤ01では、周溝の墳丘斜面よりの溝底よりやや上で散在して出土した。円筒埴輪の中でも朝顔形埴輪がめだち特にＳＫ01周辺に集中して出土した。また、古墳隅部と推定される周溝底で馬形埴輪の尾部が１点出土している。

ＳＤ02では、溝中央上層の最終堆積層内で動物ないしは人物埴輪の脚部などと円筒埴輪

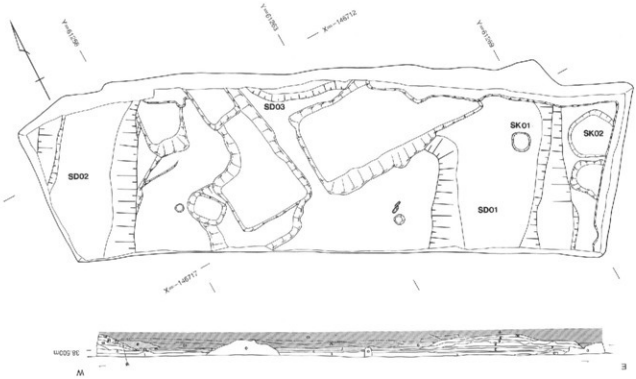


fig. 332　調査区平面図・断面図

が集中して出土した他は、大部分が墳丘裾部のやや上層で、墳丘側から流れ込む状態で出土している。出土遺物の大部分は円筒埴輪片であるが、墳丘斜面寄りで馬形埴輪の頭部が出土し、尾部も周溝中央の底面で出土している。その他の形象埴輪では盾形埴輪片・靱形埴輪が出土している。円筒埴輪は完全に須恵質のものと軟質で赤焼きのものとが相半ばする。黒斑を確認できるものはない。その他、溝中央底面で須恵器樽形甕の破片が集中して出土している。

3．ま と め

今回の第7次調査では、限定された調査ながら、畑地の下に埋もれ、その存在がこれまでわからなかった古墳の一部を明らかにすることができた。水谷地区の中位段丘上の縁辺には、昭和47年刊行の神戸市埋蔵文化財分布地図によれば、古墳状隆起として数地点の登録記載がみられ、住宅に囲まれながらその痕跡を残す地点も何ヶ所か存在する。また、調査地点の東北300mには「ホ塚」の地名が残り、水谷地区の中位段丘上には、相当な密度で古墳が分布していたと考えられる。

水谷2号墳の周溝は、最終埋没土層内の遺物と墳丘外に残存する整地層の遺物から、平安時代末期～鎌倉時代初め頃まで存在したと推定される。しかしながら、水谷2号墳では埋葬施設が完全に削平されているにもかかわらず、周溝はよく保存されており、周溝内より多量の埴輪片が出土している。埴輪のほとんどが墳丘裾近くに集中して出土し、墳丘から落下して流れ込んだものと考えられる。従って、水谷2号墳の場合、周溝外側での埴輪の囲繞はなかったと考えられる。

水谷2号墳の時期は、円筒埴輪が黒斑が認められず、タガの断面形が台形である点等から川西編年のⅣ期に、また須恵器樽形甕が共伴していることから、5世紀の後半頃と考えられる。

今回の調査では、埴輪が出土する直線的な溝3条を確認して、方形墳と推定したが、一方で造り出し部を北方向に設ける帆立貝式古墳の造り出し部の一部である可能性もあり、南側宅地及び都市計画道路予定地における調査をまって検討を進める必要がある。

fig. 333
調査区全景

54. 日輪寺遺跡　第5次調査

1．はじめに

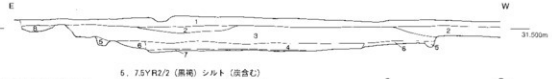
日輪寺遺跡は、神戸市西区玉津町に所在する弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。明石川の支流である櫨谷川によって開析された谷部西側の河岸段丘上に立地する遺跡で、今までに4次の調査が行われている。平成5年度の調査で知られるようになった遺跡で、遺跡名が示すように古刹である日輪寺の遺構を対象として調査を実施したところ、下層から弥生時代の遺構が確認され複合遺跡として認知されるようになった。段丘の周辺部は二ツ屋遺跡で、やはり弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。

fig. 334
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

調査面積の割りに遺構の密度は高く、撹乱部分も少なかった。調査の結果、近現代の遺構と古墳時代はじめの遺構を調査した。調査区西半のみ2面の調査を行った。

近現代の遺構は、検出した遺構は、スキ溝と溝・ピットである。ピットは柱痕跡が明瞭に確認されておらず、建物の柱になるか不明である。小型のピットは杭跡であろうと思われる。大型のピットと溝（SD01・SD02）が古く、小型のピットが次で、スキ溝が最も新しい時期のものである。スキ溝は南北方向のものが幅が広く、東西方向のものは幅が狭い。大型のピットは並んでいるが、明確に柱痕跡を確認できなかったが、掘立柱建物であろうと想定される。



1．砂作土
2．10YR4/4（暗）シルト（礫多く含む）
3．5YR3/2（暗赤褐）シルト（炭・土器含む）
4．7.5YR3/2（黒褐）シルト（炭・土器含む）
5．7.5YR2/2（黒褐）シルト（炭含む）
6．7.5YR3/3（暗褐）シルト質中～細砂
7．7.5YR4/2（灰褐）中～細砂
8．7.5YR4/4（褐）シルト

fig. 335　調査区南壁断面図

古墳時代はじめの遺構は、竪穴住居が4棟、落ち込み2基、土坑5基と住居址に伴わないピット5基である。SH22～SH24の3棟は切り合い関係にある。SH23→SH24→SH22と築かれている。SH21はSH23と同時期かと思われる。4棟すべて調査区外に延びており、全体がわかる住居址はない。

3．ま と め

今回の調査では古墳時代初頭と中世・近現代の遺構を確認した。竪穴住居は切り合い関係にあり、この地域が生活の場として適していたことを表すものである。特に最近の成果や今回の調査で櫨谷流域の遺跡の弥生時代後期から古墳時代にかけての一帯の評価が問われるものである。

旧石器の遺物が出土したことも注目される。明美礫層の上層に存在したものと思われ、明石市西脇遺跡で確認されているが、神戸市域では層的に調査された例はない。地山である礫層の被覆層に旧石器時代の生活面が存在する可能性は十分に予測されるものである。

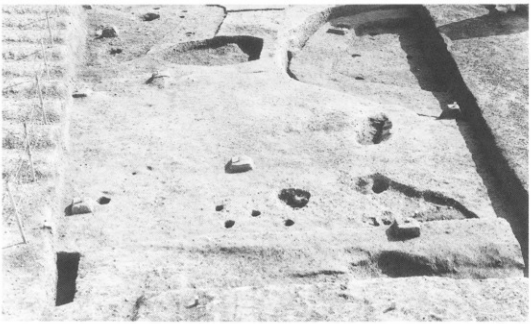


fig. 336
調査区全景

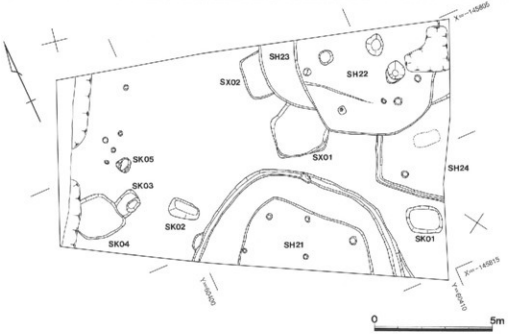


fig. 337
古墳時代遺構面
平面図

55. 日輪寺遺跡（にちりんじ）　第6次調査

1．はじめに

日輪寺遺跡は、これまでに5次にわたる調査が行われ、弥生時代後期後半の集落跡がみつかっている。

今回の調査地は、第4次調査の調査地の西側に隣接する地区である。

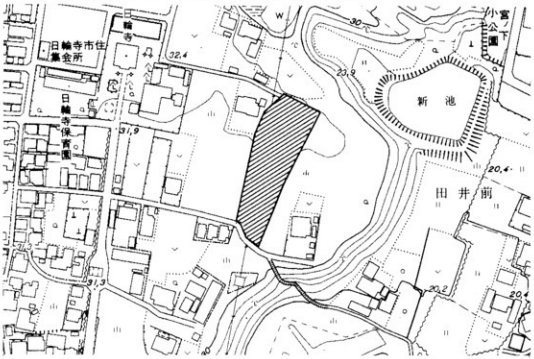


fig. 338
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

今回の調査では、第4次調査で一部を検出した住居址につながるものも含めて、計21棟の竪穴住居を検出した。

これらの住居の時期は、弥生時代後期中葉、後期後半、後期末～古墳時代初頭の3時期からなる。ただし、弥生時代後期後半の住居址が18棟と大半を占める。

住居址の平面形は隅丸方形が大半を占め、円形のものを2棟検出している。ただし、円形住居はいずれも弥生時代後期後半に位置付けられ、隅丸方形住居との時期的な差は認め

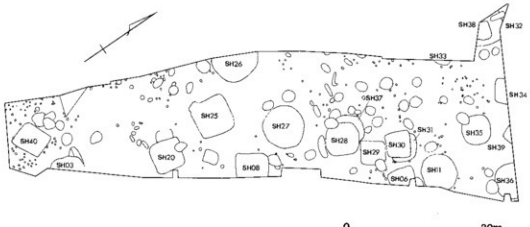


fig. 339
遺構配置図

られない。また、当該期の住居址は、いずれも、高床部を設けるとともに、少なくとも1回は建て替えが行われている。

この他、これらの住居址の特徴として、方形では一辺が約8m、円形では径約9.8mと規模が大きい点が指摘できる。この他、いくつかの住居址では、住居址コーナー付近に張り出しが認められる。住居への出入口と考えられる。

fig. 340　SH11

弥生時代後期前半の住居は、2棟のみである。先述した時期の住居址とは異なり、高床部を設けていない点が特徴的である。

弥生時代後期末～古墳時代初頭の住居は、1棟のみである。平面形は方形を呈し、1回の建て替えが行われている。高床部および中央部に土坑をもたない点が、他の時期の住居址と特徴を異にする。

なお、各住居址の廃絶後、急激に埋没するのではなく、しばらくの間は土器の廃棄場所として利用されていたようである。このため、各住居址からは多量の土器が出土している。ただし、住居が機能していた時期と、これらの土器が廃棄された時期との間にはさほど大きな差はないものと考えられる。

3．ま と め

今回の調査を含め、隣接する地区で調査した第4次～第6次の調査の結果、計40棟の住居址を検出したことになる。このなかで、弥生時代後期後半の住居が大半を占め、当該期に当集落の中心があったものと考えられる。ただし、住居址は近接して検出した箇所も認められることから、いくつかの時期に細分できるものと考えられる。

fig. 341
調査区全景

56. 今津（いまづ）遺跡　第10次調査

1．はじめに

今津遺跡は、明石川と櫨谷川の合流地点から南へ約1㎞、明石川左岸の標高約10m前後の沖積地に広がる遺跡である。これまで宅地開発事業に伴って埋蔵文化財の発掘調査が実施されてきており、弥生時代中期～古墳時代後期にかけての集落址であることが徐々に判明しつつある。周辺には東側の丘陵上に隣接して立地する弥生時代～平安時代の集落址の高津橋・岡遺跡、南側には弥生時代中期の大規模拠点集落かつ古墳時代後期の玉造り集落として知られる新方遺跡などがある。

fig. 342
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

今回の調査対象地区は、昨年度発掘調査を実施した第8次調査地点の北側に隣接する圃場2枚分である。このうち、宅地造成に伴う工事影響深度がおよぶ汚水管敷設予定部分（幅約2.5m）と擁壁施工予定部分（幅約1m）について調査を実施した。

基本層序は、1～4区では現耕土、黄灰色シルト質細砂（旧耕土）、灰白色シルト混じり極細砂～細砂（旧耕土）、淡褐灰色細礫混じりシルト（旧耕土？）、さらに下層には褐灰色極細砂質シルト、黒灰色極細砂質シルトの順で黄色～淡青灰色細砂～細礫の基盤層に至る。5

fig. 343　調査区設定図

区では下半層のシルトが削平されたためか存在しない。また、6区では基盤層が丘陵斜面に向かって上がるため、現耕土下に旧耕土層が1層あるだけで黒灰色礫混じりシルトが堆積している。

遺構が確認できた調査区は4区のみである。SD01は最大幅2.5m、最大深さ60cm、断面U字形の溝状遺構で、ほぼ南北方向を指向している。埋土は灰色系の細礫～小礫を多く含むシルト層である。出土遺物は弥生時代中期の土器底部が1点で、当該期以降の遺構と考えている。溝状遺構の形態やその方向性からみて、第8次調査地点第2・4トレンチで確認された溝状遺構（SD01）と同一の遺構の可能性も指摘できる。

出土遺物には基盤層上面に堆積した厚さ約20～30cmの極細砂質シルトとこれより上層の旧耕土層からのものがある。前者には弥生土器・土師器・須恵器・丸瓦・土製紡錘車？・曲物底部などがあり、弥生時代後期、古墳時代後期～平安時代前期のものに限られ、平安時代前期頃までは段丘崖と微高地に挟まれた後背湿地であったようである。後者では平安時代後期～鎌倉時代前期以降の遺物が出土している。

3．ま と め

今回の調査はその範囲が限定されていたため、遺構では弥生時代中期以降と推定できる溝状遺構を1条確認できたにとどまる。黒灰色極細砂質シルトから出土した遺物には、遺存状態の比較的良好な奈良～平安時代にかけての須恵器・土師器が多く、瓦や木製品も含まれることから、隣接する高津橋岡遺跡を起源とする遺跡の広がりを示唆するものと言える。堆積土層の観察結果やこれまでの調査成果からみて、調査地区の南西方向に埋没している自然堤防上に今津遺跡の集落が立地するものと推定できる。

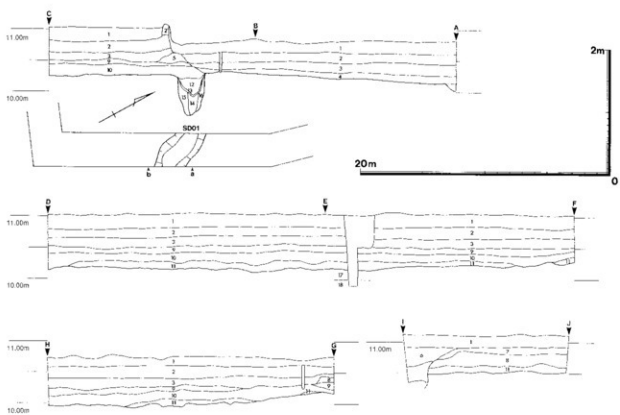


fig. 344　調査区平面図・断面図

57. 今津（いまづ）遺跡　第11次調査

1．はじめに

今津遺跡は、明石川と櫨谷川の合流地点から南へ1㎞、明石川右岸の扇状地末端の標高10m前後の沖積地に広がる遺跡である。

周辺には、南に弥生時代の集落である新方遺跡が隣接しており、東の丘陵には、弥生時代から中世の集落である高津橋・岡遺跡と接している。

今津遺跡の調査は、宅地開発が進む昭和55年に実施された第1次調査に始まり今回の調査で第11次調査となる。これまでの調査において、弥生時代中期の竪穴住居や木棺墓、土壙墓、土坑、溝や古墳時代後期の大溝、水田などが検出されている。

fig. 345
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

今回の調査は、宅地造成に伴うもので、道路部分について調査を実施した。

基本層序

上層より盛土、旧耕土、中世包含層の順で、その下層が遺構面となる。

調査区は、東から西にかけて緩やかに上がる微高地となっており、遺構は東に行くにしたがって希薄となる。

ＳＢ01

調査区中央の微高地上に位置し、直径6.0m以上、深さ20㎝を測る円形の竪穴住居である。中央付近に2本の柱穴を検出しており、おそらく4本柱の建物とみられる。ＳＤ02を切っており、時期的には弥生時代後期と考えられる。

ＳＢ02

調査区の西に位置する掘立柱建物である。東西方向であるがやや北に振っている。柱間は、東西方向が1.8m、南北方向が3.2mを測る。

柱穴から遺物が出土しており、古墳時代前期と考えられる。

ＳＢ03

調査区の東に位置する方形の竪穴住居である。大半は調査区外に延びるため詳細につい

ては不明であるが、一辺５ｍ以上の規模になるようである。深さ20㎝を測る。古墳時代前期と考えられる。

ＳＫ02　調査区の中央に位置する、長さ1.8ｍ、幅1.2ｍ、深さ1.2ｍを測る土坑である。埋土には、炭が多く含まれていた。

遺物が僅かながら出土しており、弥生時代中期後半（第Ⅳ様式）と考えられる。

ＳＤ01　調査区の西を南北にはしる、幅0.3ｍ、深さ40㎝の溝である。出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

ＳＤ02　調査区中央の微高地に位置し、幅1.4ｍ、深さ30㎝を測る南北方向にはしる溝である。ＳＢ01に切られており、出土遺物から、弥生時代中期後半（第Ⅳ様式）と考えられる。

ＳＤ04　調査区の西を南北にはしる幅0.5ｍ、深さ10㎝の溝である。埋土が砂になっておりこれは、ＳＤ05・06にも共通することである。切り合い関係等から、中世の遺構の可能性が考えられる。

ＳＤ07・08　調査区の東を南北にはしる溝で、幅0.3ｍ、深さ30㎝前後を測る。共に古墳時代前期と考えられる。

３．ま　と　め　今回の調査では、弥生時代から古墳時代にかけての住居址を中心とした遺構群を検出した。集落の一部と考えられるが、東方向に遺構が拡がる余地は少なく、遺物の出土も希薄であることなどから、集落でも縁辺部にあたると考えられる。

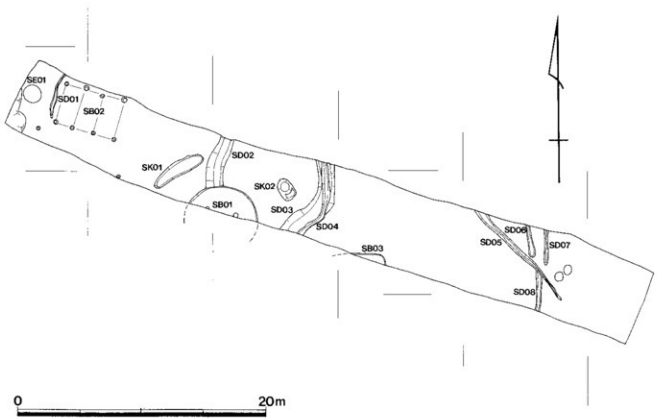


fig.346　調査区平面図

58. 今津（いまづ）遺跡　第12次調査

1．はじめに　今回の調査対象地区は、今年度発掘調査を実施した第10次調査地点の西側に隣接する圃場である。このうち、宅地造成に伴って、工事影響深度がおよぶ汚水管敷設予定部分（幅約６ｍ）の総延長約65ｍについて調査を実施した。

fig. 347
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要　基本層序は、現耕土、淡黄灰色シルト混じり極細砂～細砂（旧耕土）、淡黄灰色シルト混じり細砂（旧耕土）、暗乳灰色シルト質極細砂（旧耕土？）、暗黄色小礫混じり粘土あるいは淡乳灰色シルト質極細砂（第１遺構面基盤層）、明灰色極細砂質シルト（第２遺構面基盤層）の順である。

以上から判るように、今回の調査区では、全面には及ばないものの、２面の遺構面が確認できている。

第１遺構面　第２遺構面と同様に、遺構が集中して確認できた調査区は西端約20ｍ分である。掘立柱

fig. 348　第１遺構面全景

fig. 349　第２遺構面全景

建物２棟、柱穴・ピット25基、土坑４基、落ち込み２基、溝状遺構２条などがある。

出土遺物からみて、１４世紀前半期の遺構群と考えられる。また、調査区東端部では流路を２条確認している。

掘立柱建物１　東西１間×南北１間（3.0m×3.0m）が確認されたのみである。柱間距離が３ｍと長い点が特徴的である。また、ピット05では柱痕基底部に須恵器鉢を利用した礎盤を確認している。

掘立柱建物２　東西３間×南北１間（6.5m×2.7m）が確認された総柱の建物と考えられる。柱間の距離が不規則ではあるものの、柱痕はいずれも直径約20㎝で、掘形の深さは最大約70㎝である。ピット37では掘形内より青磁碗底部と不明鉄製品が出土してる。なお、13・20・38では円礫を用いた礎盤が中層で確認されており、柱の補修が行なわれたものと考えられる。

fig. 350
第１遺構面平面図　0　5m

SP12　直径15cm、深さ5cmのピットである。不明鉄製品が1点出土している。

SR02　最大幅50cm、最大深さ8cmの流路で、灰色砂礫を埋土とする。

SR01　最大幅4m、最大深さ45cmの流路で、第1遺構面を形成する乳黄色粘土層の下層の乳灰色シルト質極細砂層上面から切り込まれているため、厳密には第1遺構面より下層で、第2遺構面より上層の遺構と言える。

最上層から古墳時代後期末の完形の須恵器が出土しており、最終埋没は当該期にあたるものと考えられる。やや蛇行しているが、南北方向に流下するものと考えている。古墳時代後期末の遺構であろう。これまで第9・10次調査地点で確認されている流路と同様の性格をもつものと考えられる。

なお、第1遺構面では、明確な遺物包含層がほとんど遺存しないため、出土した遺物量は総体的に少ない。

第2遺構面　乳灰色シルト質極細砂を基盤層とする遺構面で、土坑3基、ピット5基、流路1条を確認した。いずれも弥生時代中期のものと考えられる。なお、中央部以東には幅1.5mのトレンチを設定して調査を実施したが、遺構面は続くものの、遺構・遺物ともに全く確認できていない。

SK201　長径1m、短径30cm以上、深さ30cmの楕円形の土坑で、埋土は黒灰色極細砂質シルトである。弥生土器の小片が出土している。

SK202　長径3.6m、短径1.4m、深さ40cmの楕円形の大型の土坑で、埋土は3層に大きく分けられる。このうち、遺物を主として出土するのは2層の黒色シルト質極細砂層である。弥生土器片やサヌカイト製石鏃1点、サヌカイトフレイクが出土しているが、概して出土量は少ない。

SK203　長径1.7m、短径1.1m、深さ40cmの不整形の土坑で、平面的には楕円形の土坑が2基結合したような形態である。埋土上半は細礫～小礫混じりの暗褐色シルト質極細砂で、下層は暗褐灰色細砂混じりシルトである。遺物は下層に集中しており、弥生土器のほか、石鏃4点、サヌカイトフレイク・チップがある。

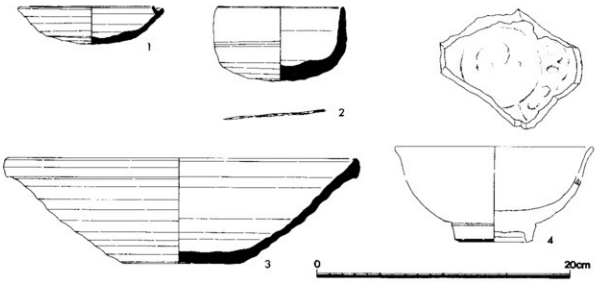


fig. 351　出土遺物実測図　　1・2．SR01　3．SP05　4．SP37

なお、ＳＫ202・203の上面検出中にもサヌカイト製石鏃やフレイク・チップが比較的まとまって出土している。

ＳＲ201　最大幅５ｍ、最大深さ１ｍ、断面が鈍いＶ字形の流路である。北東から南西に向けて流下しているようである。出土遺物には、ほぼ完形の弥生土器甕をはじめとする大型の弥生土器片がある。断面図に示したとおり、この流路の大部分が埋没した後も、後述する安定した第１遺構面が形成されるまでの期間は、少なからず水流が継続していたようである。

３．ま と め

今回の調査では、遺構面が２面確認されたにとどまらず、各遺構面ともに明確な遺構が確認できたため、調査区西端が本来の今津遺跡の北東端にあたるものと推定される。

今回の調査成果についてまとめると、

①第２遺構面で確認した弥生時代中期の集落址の縁辺部を推定させる遺構群が確認されたことは、集落址の立地する微高地が南西方向に拡がっていることを物語り、さらに北方へも延びる可能性を示唆している。

②第１遺構面の中世の掘立柱建物と土坑で構成される集落址の広がりについても、今津遺跡での新しい調査成果として注目される。

③ＳＲ01にみられるように、東側に存在する丘陵裾部の地形に沿った流路の存在も確認できた。出土遺物は高津橋・岡遺跡を起源とするものと考えられるが、遺跡の広がりを示唆するものと言える。

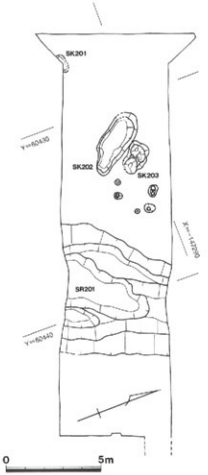


fig. 352
第２遺構面
平面図・断面図

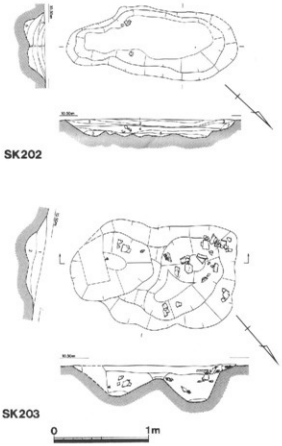


fig. 353
ＳＫ202・203
平面図・断面図

59. 新方遺跡東方地区　第７次調査

１．はじめに

新方遺跡は、明石川と伊川の合流する地点の北東に位置する遺跡で、昭和45年に発見されて以来、弥生時代～中世にかけての遺構・遺物が確認されている。

東方地点は、新方遺跡の中にあってはその南端にあたる。南側100ｍの地点には昭和61年度に発掘調査された上池遺跡が位置している。

新方遺跡東方地点のこれまでの調査は、昭和59年度に都市計画道路玉津鳥羽線の築造に伴って３次にわたる調査が、今回の調査地のすぐ北側で実施されている。また、この玉津鳥羽線の北側では、平成２年度に民間の事業所の新築工事に伴って第４次調査が行われている。この他に調査区の東側では、平成８年度に共同住宅の建設に伴い、第５次調査が実施され弥生時代中期・終末期の竪穴住居など多数の遺構が確認されている。

これまでの玉津鳥羽線関連の調査では、北から南方向に流れて途中で大きく２つに分かれる、最大幅15ｍ、深さ1.2ｍの弥生時代前期から中期を主体とする遺物を多量に含む河道が検出されている。

また第５次調査では、河道の他、弥生時代後期終末の遺構・遺物が多数出土しており、弥生時代後期終末の集落の一部を確認している。

fig. 354
調査地位置図
１：2,500

２．調査の概要

今回の調査地は、この第３次調査地の南に接する地点であり、調査された弥生時代の河道の西側に向かう部分の北肩が検出されることが予測されていた。

調査地は、水田に盛土をした状態であったため、市街地の中での調査のような撹乱もなく、層序に大きな乱れは認められなかった。

基本層序

層序としては、第１層（T.P.＋7.3ｍ）が水田耕土、第２層（T.P.＋7.1ｍ）が水田床土、

第３層（T.P.＋6.9m）が中近世段階の耕作土、第４層（T.P.＋6.7m）が遺物包含層（中世の包含層）となり、遺構検出面（T.P.＋6.5m）へいたる。ただし、第４層は地形が北東から南西へ緩やかに傾斜していることや、部分的な削平によって確認できない部分（主に調査地北東側）もあった。

fig. 355　調査区全景

検出遺構　今回の調査において、土坑・河道等を検出した。

河道　第３次調査および第６次調査で検出された、河道２につながると思われる河道を検出した。従前の調査において河道は、奈良時代が最終堆積であるとされていたが、今回の調査区において検出された河道２における最終堆積層には１３世紀代の須恵器が確認されている。後世に掘りなおされた可能性が残るものの、河道２の最終堆積の時期は１３世紀代とみられる。１３世紀代の堆積層の下では、おおよそ３層に分類でき、奈良時代の堆積層、弥生時代終末期の堆積層にわかれる。さらにごく一部分で下層を検出しており、この層が弥生中期の堆積層であると考えられる。

なお、河道については、調査影響範囲の関係から、部分的に下層を確認したに止まる。

３．ま と め

今回の調査では、第３次調査および第６次調査に続くと考えられる河道を検出した。これにより、第６次調査で確認されていた河道の方向を今回の調査で追認する形となった。

弥生時代前期の河道は、埋没後は周辺も含めて湿地帯となっていたようで、周囲の開墾等による生産跡や生活跡が確認できるようになるのは中世以降になってからのことのようである。

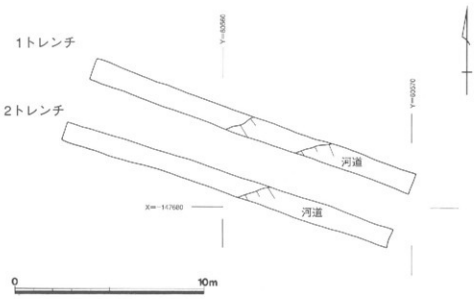


fig. 356
調査区平面図

60. 新方遺跡七反田地区

1. はじめに

新方遺跡は、山陽新幹線建設に伴う調査によって明らかになった遺跡である。昭和45年度の調査では、弥生時代中期初頭から鎌倉時代にかけての遺物が多量に出土した。その後に実施された発掘調査で、明石川流域における弥生時代の大規模な集落遺跡として、その様相が明らかになりつつある。

七反田地区では、昭和52年度の調査で、弥生時代中期の土器、奈良・平安時代の木製品などが出土した。また、平成８年度の調査では、弥生時代前期の壺、弥生時代中期初頭の甕、古墳時代後期～飛鳥時代の須恵器などが出土している。

この度、当該地において住宅建築が計画され、擁壁工事により、埋蔵文化財が影響を受ける範囲について発掘調査を実施した。

調査地は、明石川左岸の氾濫原に立地し、標高は約８ｍである。

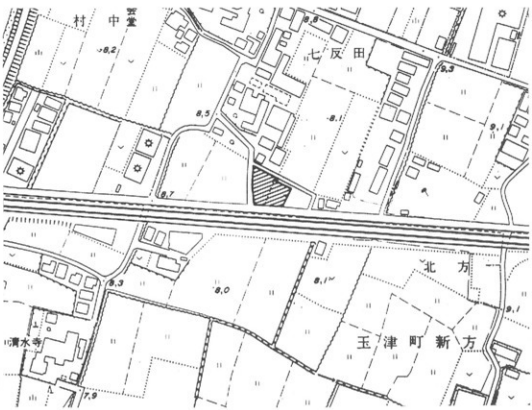


fig. 357
調査地位置図
１：2,500

2. 調査の概要

基本層序は、盛土・耕土・旧耕土・淡灰色粘土・茶灰色粘質土・暗灰色粘土・緑灰色シルトである。

土層の堆積状況をみると、下層の緑灰色シルトは西から東へ緩やかに傾斜し、中層の茶灰色粘質土は西側ほど厚く堆積している。旧耕土層以上は、水平堆積である。

遺構としては、東半でトレンチに直交する溝状の落ち込みを確認した。幅約60㎝、深さ約40㎝である。

遺物は、各層から須恵器・土師器が出土したが、いずれも小片で、周辺からの流れ込みと思われる。

3．ま と め　今回の調査では、溝の他に明確な遺構の検出はなかったが、古代～中世の遺物を確認できた。堆積土の状況から、平成８年度の調査と同様、古代～中世においては湿地であったと考えられる。

工事影響深度の関係上、掘削して確認はしていないが、さらに下層に弥生時代の遺物包含層や遺構が存在する可能性がある。

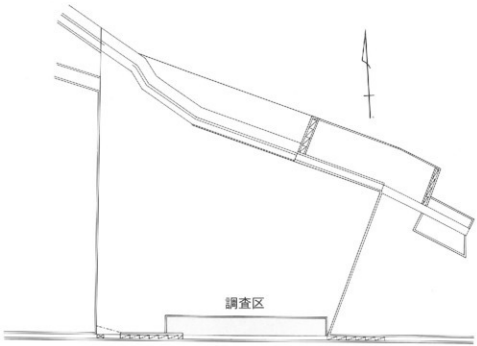
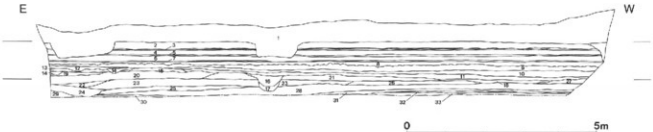


fig. 358
調査区設定図

0　20m



1．盛土
2．耕土
3．床土
4．灰黄色粘性細砂質土（旧耕土）
5．淡灰黄色粘性細砂質土（旧床土）
6．淡褐灰色粘性砂質土（旧耕土）
7．灰黄色粘質土（旧床土）
8．淡灰色粘土（Mn粒含む）
9．淡茶灰色粘土（Mn・Fe混じり）
10．灰茶色粘土（Fe・Mn混じり）
11．淡茶灰色粘土（Fe混じり）
12．淡灰色粘土（Fe混じり）
13．淡灰色粘土（Fe混じり）
14．灰色粘土（炭小粒混じり）
15．乳黄色粘土（Fe混じり）
16．暗緑灰色粘性シルト
17．暗灰色粘土
18．褐灰色シルト質粘土
19．淡灰色粘土
20．明緑灰色粘性シルト
21．暗灰色粘性シルト
22．緑灰色粘土混じり灰色粘土
23．暗灰色粘土（炭小粒混じり）
24．暗灰色粘土
25．暗灰色シルト質粘土
26．緑灰色シルト
27．青灰色シルト
28．緑灰色シルト
29．暗灰色弱粘土
30．暗灰色粘性シルト
31．暗灰色シルト
32．暗緑灰色シルト質粘土
33．淡黒色シルト質粘土

fig. 359　調査区断面図

61. 新方遺跡野手西方地区　第３次調査

１．はじめに

新方遺跡は明石川と伊川によって形成された沖積地上に位置している。これまでの度重なる調査で、弥生時代、古墳時代、奈良～平安時代、中世の遺跡の存在が判っている。

この調査は野手西方に計画された土地区画整理事業に伴うもので、平成８年度以来街路部分を中心に調査を行ってきた。昨年度の調査では弥生時代の方形周溝墓から、石鏃が刺さった状態の人骨が見つかっている。

fig. 360
調査地位置図
1：2,500

２．調査の概要

基本層序

調査地の基本層序は、第１層：現代の盛土、第２層：旧耕土、第３層：近現代の洪水砂、第４～８層：中世以降の水田土壌、第９～10層：弥生時代前期の遺物包含層、第11～12層：弥生時代より前の堆積層である。

遺構の検出は第７層と第11層の上面で行った。

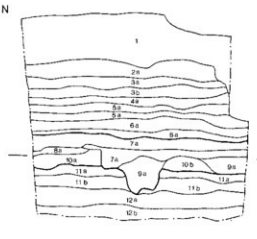


fig. 361　調査区東壁断面図

1	盛土	
2 a	耕土	
3 a	2.5Y5/3 黄褐　シルト質細砂	
3 b	2.5Y5/4 黄褐　極細砂～中砂 シルトブロック含む（洪水砂）	
4 a	2.5Y6/2 灰黄　シルト質極細砂	
5 a	2.5Y6/1 黄灰　シルト質極細砂～細砂 上面に Fe_2O_3	
5 a'	2.5Y6/2 灰黄　シルト質極細砂～細砂 グラニュール含む	
6 a	2.5Y5/1 灰黄　シルト質極細砂～細砂 グラニュール含む　上面に Mn	中世以降の水田土壌層
6 a'	5Y5/1　灰　シルト質極細砂～細砂 グラニュール含む　Fe_2O_3 雲状沈	
7 a	2.5Y4/1 黄灰　グラニュール混じりシルト	
7 a'	5Y4/1　灰　グラニュール混じり細砂質シルト	
8 a	2.5Y4/1 黄灰　グラニュール混じりシルト	
9 a	5Y3/1　オリーブ黒　極細砂質シルト 細砂～中礫含む　炭、土器多量	弥生時代前期の遺物包含層
10 a	10YR3/2 黒褐　シルト質細砂～極細砂	
10 b	2.5Y4/2 暗灰黄　細砂～グラニュール シルトブロック含む　泡沫悪い	
11 a	5GY3/1　暗オリーブ灰　シルト	
11 b	10GY4/1 暗緑灰　極細砂質シルト	
12 a	10GY3/1 暗緑灰　シルト	
12 b	10GY4/1 暗緑灰　極細砂質シルト	

第１遺構面　第４～８層には弥生時代～中世の各時代の遺物が含まれており、いずれも中世以降の水田土壌であることが判る。その中でも粘質が強く、比較的遺存状態が良かった第７層の上面で精査を行った。

その結果、一部に土壌の盛り上がり部分を検出したものの、明確な畦畔などは認められなかった。

第２遺構面　中世以降の水田土壌を取り去った面で、弥生時代前期の湿地状の落ち込みを検出した。見つかった落ち込みは北東－南西の方向に細長く、最も状態の良い所では幅約１ｍ、深さ20㎝の凹地になっているが、南西側では輪郭が次第に不明瞭になってしまう。

落ち込みの中からは弥生土器数個体が一括で出土しており、周辺から投棄された土器のうち、たまたま深みにはまった土器だけが耕作による削平を免れたものとみられる。

また落ち込みの北側には土壌化を受けた面が続いており、当時の水田であったとみられる。しかし遺構面の状態が悪く、畦畔などは見つからなかった。

弥生時代の遺物としては他にサヌカイトの石鏃・石錐などがあるが、ほとんどが上層の土壌層からの出土である。

３．ま　と　め

今回の調査では、中世以降の水田土壌層、弥生時代前期の湿地状の落ち込みを検出した。見つかった遺構は数少ないものの、土壌層中には弥生時代～中世の遺物が相当量含まれており、集落の縁辺に位置することを物語っている。しかし土質からみて居住地には不向きで、弥生時代以来、水田として利用され続けてきた場所であろう。

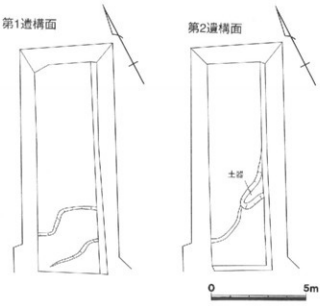


fig. 362　調査区平面図

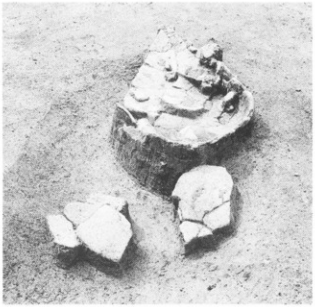


fig. 363　落ち込み内出土土器

62. 出合（であい）遺跡　第39次調査

1．はじめに

出合遺跡は明石川下流域の西岸、明石累層からなる台地上と、沖積地とにまたがる広範囲におよぶ遺跡である。これまでの調査で、弥生時代中期の周溝墓、弥生時代後期の溝、古墳時代中頃から後半の竪穴住居、帆立貝式古墳、奈良時代の掘立柱建物・井戸、平安～鎌倉時代の掘立柱建物などが検出されている。

今回の調査地は、第６～８次調査地の北側、第38次調査地の南西に隣接しており、南西から北東へ緩やかに傾斜する地形に立地する。

fig. 364
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

調査区は「コ」字型で各辺ごとに１～３トレンチを設定した。

基本層序

基本土層は、①現耕土・盛土、②黄灰色粘性砂質土（旧耕土）、③暗灰色粘性シルト、④茶灰色粘質土、⑤灰色細砂質シルト、⑥淡灰色シルトである。（③～⑤は遺物包含層）

遺構面は、③～⑥の各土層上面で計４面確認できたが、第４面は３トレンチのみでしか検出できなかった。以下、遺構面ごとに記述する。

第１遺構面

暗灰色粘性シルト上面で土坑や耕作痕などを検出した。中世以降の水田と思われる。

１トレンチ

南半で、南北方向の耕作痕と牛と思われる足跡を検出した。北半は、不定形の土坑やピットをわずかに検出したにすぎない。

２トレンチ

西半北壁沿いで、人と思われる足跡を５ヵ所検出した。東から西への歩行と思われる。埋土は灰色粘土である。

３トレンチ

トレンチ中央から南にかけて、南北方向の畦畔状遺構を検出した。断面形は台形で、幅は上端で70cm、下端で115cm、高さは数cmである。

第２遺構面

第１遺構面のベース層である暗灰色粘性シルトは、小片ながら遺物を多く含む。特に、第２遺構面直上で遺物の出土が目立った。時期は、出土遺物から中世と思われる。

1トレンチ　南半は、第3遺構面の流路1の最終堆積層上面でピット、土坑などを検出した。

SP19　トレンチ北半で検出した、直径32cm、深さ65cmの柱穴である。灰色シルト質粘土を埋土とし、柱根も残存している。この柱穴の北側と南側にもSP23・25が一列に並ぶことから、掘立柱建物の一部である可能性は高い。

2トレンチ　トレンチを縦断するかたちで、溝を検出した。

SD01　北西—南東方向の溝で、幅約2m、深さ約60cmを測る。北側の肩から、階段状に落ち込んでいき、南側は緩やかに階段状を呈しながら遺構面に続く。最深部は幅約30cmの細い溝状になっており、中央のSK09に接続する。最深部の溝の両側で、牛と思われる足跡を検出した。埋土は大きく上下2層に分層でき、下層の砂層から多くの遺物が出土した。遺物は、古墳時代の須恵器・土師器に混じって、中世の須恵器・土師器や埴輪片・瓦片等が出土している。

SK09　トレンチ中央で検出した、2mほどの不定形土坑である。杭が10本以上打ち込まれており、下層からは板材も出土した。形状や先述の溝との関連から、水溜めと思われる。

3トレンチ　北半は、暗灰色シルトを埋土とする土坑・ピットなどを検出した。南半は、南北方向の耕作痕が明瞭に残る。埋土は淡灰色シルトである。

北端は、SD01に向かい緩やかな階段状に傾斜していく。

SK02　トレンチ北半のSD01への傾斜部分で検出した。40cm大の隅丸方形の土坑で、深さは約24cmである。埋土は、暗灰色シルトで炭粒が混じる。

SK03　トレンチ中央で検出した。西側は調査区外のため不明であるが、50～60cm大の方形土坑と思われる。深さ約22cmで、埋土は上層が暗褐灰色シルト、下層が暗灰色粘性細砂である。

SK05　トレンチ中央で検出した。東側は調査区外のため不明であるが、深さ28cm、幅55cmを測

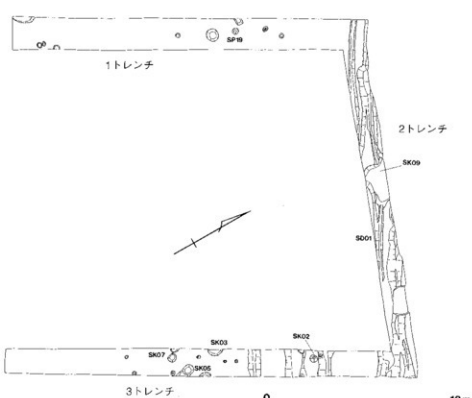


fig. 365
第2遺構面平面図

る。埋土は上層が灰色シルト、下層が暗灰色シルト質粘土である。北西側がピット状に窪んでいる。

ＳＫ07　トレンチ中央のＳＫ05西側で検出した。47㎝×42㎝の隅丸方形の土坑である。深さは30㎝で、埋土は暗褐灰色シルトである。

第３遺構面　流路２条と、土坑・ピットなどを検出した。古墳時代後期と考えられる。

１トレンチ
流路１　南半で南北方向の流路１を検出した。東側の肩を検出したのみで、西側については不明である。深さに関しても、工事影響レベルまでの掘削では底を確認できなかった。

堆積土は、南端で灰色極細砂と淡褐色細砂のラミナが見られるが、その他は暗灰色粘質土～淡灰色シルトである。

遺物は、肩部に須恵器坏蓋・身がセットになって出土した。その他、斜面部から須恵器・土師器の土器群を検出したが、流路内埋土からはまとまった出土はない。

また下層堆積土の暗灰色粘質土上面で、径約30㎝の土坑を検出した。深さ約10㎝で、埋土は淡灰色シルト質粘土である。土器群より一段階新しい時期の堆積後の遺構と思われる。

２トレンチ
流路２　西半で南北方向の流路２を検出した。幅は約７ｍで、底は工事影響レベルの関係上確認できなかったが、約1.5ｍほどと思われる。堆積土は砂層が主体で、堆積土上層から下層にかけて、古墳時代後期の須恵器坏の完形品が数点出土した。

３トレンチ　土坑やピットを検出したが、建物などは確認できていない。

ＳＫ13　トレンチ中央で検出した。東側は調査区外のため不明であるが、径約60㎝を測るものと思われる。灰色粘性シルトと暗灰色粘土を埋土とする。南西側に細長い突出部があり、柱の抜き取り痕と考えられる。埋土最上層に、須恵器坏身が水平に据えられていた。土器内からは、特に遺物は出土していない。

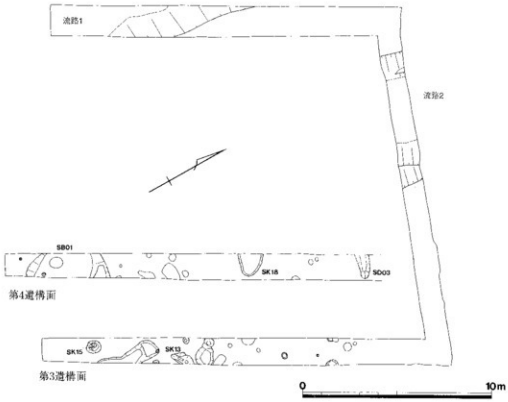


fig. 366
第３・４
遺構面平面図

fig. 367　流路 2

fig. 368　ＳＫ18

ＳＫ15　トレンチ南端で検出した。直径65～80㎝で、深さ50㎝の円形土坑である。埋土は、上層が暗灰色シルト質細砂、下層が灰色シルト質細砂である。一部、炭層を薄く挟む。確証は得ていないが、先述のＳＫ13とともに、掘立柱建物を構成していたと思われる。

第４遺構面　弥生時代後期の遺構面で、３トレンチのみで検出した。１・２トレンチについては下層を確認したが、３トレンチと同様な土層上での遺構・遺物の検出はできなかった。

ＳＤ03　３トレンチ北半で検出した溝状遺構である。東側は収束しているが、西側については、調査区外のため規模は不明である。深さ約30㎝で、埋土は、上層が灰色細砂で、下層が暗灰色シルト質細砂である。

ＳＫ18　３トレンチ中央やや北寄りで検出した。西側は調査区外のため不明であるが、最大幅135㎝、深さ15㎝の浅い断面皿状の土坑である。上層には炭層が堆積しており、これを除去した段階で遺物を検出した。甕片や高坏片が出土している。

ＳＢ01　３トレンチ南端で検出した。西側一部と東側の大半は調査区外のため不明であるが、推定直径4.5ｍの歪な円形になるようである。深さは約40㎝で、埋土は、灰色細砂質シルト～粘性シルトである。下層に炭を含む。遺物は、中央部で甕が炭とともに出土し、北半から高坏や甕片が出土している。

３．ま　と　め

以上のように、限られた範囲の調査ではあったが、明確な遺構や土器量も多く、一定の成果を上げることができた。

簡単にまとめると、弥生時代後期の段階では、東側に土坑や住居などの遺構が集中している。古墳時代後期には、東側は引き続いて居住域であるが、西側は流路で大きく削られており、他の遺構は検出できなかった。中世の段階にはいると、流路も埋まり、西側にも土坑やピットが広がるようになる。その後、耕作地へと変化していくようである。

このような事が判明した反面、建物については、調査区の形状の関係で明確にはできなかった。２条の流路も、どのような形でどこに接続していくのかは確認していない。また、今回の調査は、今後、時代・時期ごとの集落変遷を考えていく上で、ひとつの資料となると思われる。

63. 出合（であい）遺跡　第40次調査

1．はじめに

出合遺跡は、明石川下流域西岸の低位段丘および沖積地上に立地する。出合の名前の由来は明石川と櫨谷川の合流点に位置するためで、古くから交通の要衝として重要な場所である。現在では国道175号線が遺跡の東側を通り、車両の往来が著しい場所である。この遺跡は、住宅都市整備公団による『出合ふれあいの街』建設に伴う発掘調査が、瀬戸内考古学研究所によって昭和52年以降行われ、古墳～鎌倉時代の集落跡、古墳群が確認された。以後、道路建設事業や、小規模宅地開発により、順次、遺跡の様相が明らかになりつつある。

fig. 369
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

基本層位　現地表高は海抜約11mである。調査区は西側から任意に1～5区の地区分けを行った。

黒色粘質土（耕作土層）の下に茶灰色粘質土（床土）、黄灰色粘質土があり、この層で鎌倉時代の遺構が検出された（現地表下約30cm）。その下には、奈良～平安時代の土器を含む灰色粘質土が堆積する部分がある。4・5区では、黄灰色粘質土、灰色粘質土の面で遺構が確認できず、その下の灰褐色砂質土（現地表下約50cm）で掘立柱建物を検出した。

検出遺構　掘立柱建物が5棟、柵列が3列、土坑（穴）1基、溝1条、ピット（小穴）多数が検出された。遺構は2・5区で集中して検出され、その他の部分では、希薄であった。

SB01　2区で発見された掘立柱建物で、東西方向3間×南北方向3間（6×6.2m）の総柱建物である。今回検出された建物の中で一番規模が大きい。柱穴からは、13世紀後半を下限とする土器が出土している。

SB02　2区で発見された掘立柱建物で、棟行3間×梁行2間（6×4.2m）の総柱建物である。柱穴から出土した土器は、11世紀末頃～12世紀前半のものがあるが、建物の時期と一致するかは判らない。また上記2つの建物の柱穴には、柱の沈下を防ぐために、根固めの

石や板材で礎板を入れているものが発見された。

SB03　2区～3区で発見された東西方向2間×南北方向2間（4×4.2m）の総柱の掘立柱建物で、今回検出された建物の中で最小規模である。

SB04　4区で発見された掘立柱建物で、東西方向2間×南北方向2間以上（4.6×5m）の規模である。この建物は、他の遺構が確認できた黄灰色粘質土、灰色粘質土の面で確認できず、その下の灰褐色砂質土（現地表下約50cm）で平面プランを検出した。埋土からは、遺物は出土しなかった。

SB05　5区東半部で発見された2間×1間以上の掘立柱建物で、柱間は1.8m程度である。

SA01　1区で発見されたおよそ2m間隔の柱列で、掘立柱建物を構成する柱穴よりも小さいものが多い。簡単な構造の柵と考えられる。

SA02　2区西半部では、およそ1m間隔の柱列が発見された。4本ずつの柱列が2ヵ所、3mの間隔を空けて直線状に並んでいる。SA01と同様の柵列と判断される。中央の空閑部分は、出入口とも考えられるが、明確ではない。

SA03　東西方向に1.8m間隔で並ぶ5mほどの柵列である。SB04とほぼ同方位でありそれに付随するものと考えられる。柱穴の規模はSB01とほぼ変わらない。

3．ま と め

今回の調査では、鎌倉時代の掘立柱建物や土坑やピットが発見された。

掘立柱建物のSB01～03は、重複して造られており、さらに北側と東側に柱穴の分布が拡がることから、このあたりを屋敷地として、おそらく十年～数十年の単位で、建物を造り変えていたことが窺われる。また、これらの建物の柱列の方向がほぼ同じであることから、屋敷地内に複数の建物が同時期に存在し、他の建物配置に規制されながら、造作が行われたと判断される。

掘立柱建物SB04は、他の遺構検出面より下層で確認されたこと、他の建物と柱列の方向が異なっていることから、時期が遡ることが想定されるが、柱穴の埋土から時代を判断できる遺物が発見されなかったため、確証はない。

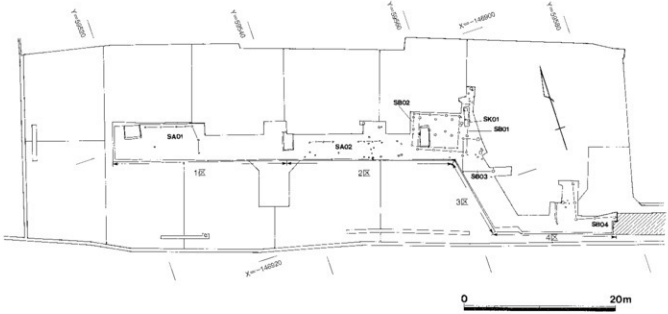


fig. 370　調査区平面図

64. 出合（であい）遺跡　第41次調査

1．はじめに

今年度5月に同地点において、個人住宅建設に先立つ擁壁部分の発掘調査がおこなわれたが（第39次調査）、今回は住宅部分について調査を実施した。

fig. 371
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

第1遺構面

調査は、遺物包含層・遺構に影響を与える杭部分のみを対象としたものである。

褐灰色シルト層上面で検出した。遺構は希薄で、A－1区溝1条と不定型の土坑1基を検出したにすぎない。

溝は、南東から北西方向の幅30cm、深さ5cmで土師器・須恵器の小片が出土している。

また土坑は一辺70cmほどの凹凸のある方形を呈し、深さは15cmである。いずれも中世の遺構と考えられる。

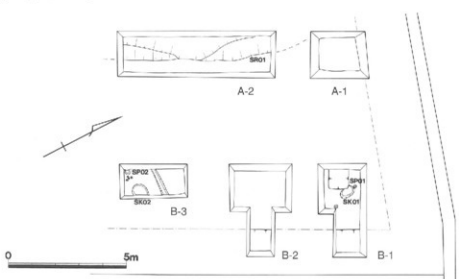


fig. 372
第2遺構面平面図

第２遺構面　灰色粘質シルト上面で検出した、古墳時代後期の遺構面である。

ＳＲ01　トレンチにほぼ並行して北から南に流れる流路である。第39次調査で検出された流路２に繋がるものと考えられる。

埋土からは須恵器・土師器や埴輪など大量の遺物が出土した。

ＳＫ01　長径65㎝、短径40㎝、深さ15㎝の楕円形の土坑である。遺構の一部は試掘坑（T.P.１）によって切られている。埋土から土師器片が若干出土している。

ＳＰ01　径15㎝、深さ10㎝のピットである。埋土から土師器片が若干出土している。Ｂ－１区からはもう一つ同規模のピットが検出されているが、建物を構成する柱穴であるかどうかは判断できない。

ＳＫ02　長径70㎝以上、短径60㎝、深さ10㎝の楕円形になると思われる土坑である。遺構の東側はトレンチ外に延びる。埋土から須恵器片や土師器片が若干出土している。

ＳＰ02　径25㎝、深さ15㎝のピットである。埋土から土師器片が若干出土している。これも建物を構成する柱穴であるかどうかは判断できない。

このほか、ＳＫ02とＳＰ02の間あたりで径７㎝程度の小ピットがまとまって検出されている。杭跡とも考えられるが、詳細は不明である。埋土から遺物の出土もなかった。

第３遺構面　弥生時代後期の遺構面で、Ｂ－１区でのみ遺構が検出された。

ＳＤ02　幅50㎝、深さ30㎝の東西方向の溝である。溝中からは、完形品をふくむ弥生土器がまとまって出土している。甕のひとつには体部に径約１㎝の穿孔を施したものもふくまれている。第39次調査のＳＤ03に繋がるもので、溝の東側の収束部分が検出されている。

３．ま と め

今回の調査は、面積が狭く遺構個別の性格を認識するには十分でなかったが、流路をはじめ大量の遺物の出土があった。

弥生時代後期の溝は１条だけの検出であったが、穿孔の伴う完形の甕をはじめ集密に出土しており単なる投棄によるものではないと考えられる。古墳時代後期では、２本の流路があり、遺構も多く検出されている。具体的な建物を構成するような柱穴列などは確認されていないが、集落が広く存在していたであろうことは想像に硬くない。

新興住宅外の周縁に位置し、今後も農地が徐々に開発されていくものと予想され、小規模であっても最大限の調査を実施し、豊かな集落であったであろう出合遺跡の解明のための資料の蓄積がこれからも続けられよう。

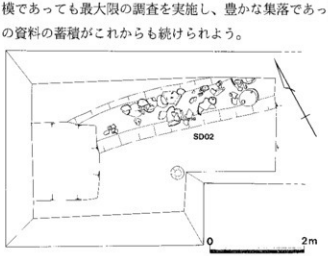


fig. 373
Ｂ－１区
第３遺構面平面図

Ⅲ．平成10年度の通常事業に伴う発掘調査

1．附物遺跡　第4次－1・2調査

1．はじめに

附物遺跡は、六甲山系の北側を北東に流れる八多川上流に位置する。当遺跡内を、三木市と三田市を結ぶ、県道三木三田線（三木街道）が通る。

当遺跡は平成2年に八多小・中学校の建て替え工事に伴う発掘調査（第1次調査）で、中世～近世にかけての集落遺跡であることが判明し、平成7、8年の圃場整備事業に伴う調査（第2、3次調査）で同時期の遺跡の拡がりが確認された。今年度は試掘調査に基づき、圃場整備工事によって遺跡に影響がおよぶ部分について発掘調査を実施した。

fig. 374
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

調査前の状況は、八多川に面した南東向きの棚田になっていた。工事が予定されている排水路部分の調査を行うため、現況水田面の高低差によって、北東側から任意に1～3区の地区分けを行った。

1　区

長さ約27m、幅4mの調査区である。現況耕作土の下に茶褐色シルト（床土）、灰色～灰褐色系シルト・粘質土（旧耕作土：数層に分層可能、中世の土器を含む）が約30cmほど堆積する。それ以下は淡灰色混礫シルト、淡灰色シルト質混礫細砂が堆積し、遺物、遺構は確認できなかった。

2　区

長さ約30m、幅4mの調査区である。現況耕作土の下に茶褐色シルト（床土）、灰色～灰褐色系シルト・粘質土（旧耕作土：中世の土器を含む）が約10cm堆積する。その下層は淡灰色砂質シルト（混礫）となる。

調査区内では、炭の詰まった土坑（ＳＫ01）が発見されたが、後述の瓦窯址の付属遺構と判断されるため、次項で述べる。

2区拡張部　2区の北側に発掘残土の置場を設けるため、現況耕作土を除去したところ、炭、焼土、窯の壁片、瓦が大量に発見され、瓦窯址であることが判明した。

瓦窯址構造　長軸方向約4.6m（両方の焚口の外面の寸法）、短軸方向約2.2m（排水溝内側までの寸法）の楕円形の遺構で、長軸方向の両端に焚口が設けられている。窯体内は、燃焼室と焼成室に分けられ、境目にくびれる部分（岸畦）が認められる。窯体は瓦の砕片と粘土で構築されている。また、窯の地上部の構造は、窯の操業が終わり、水田に戻される際に崩されており、不明である。

焚口　焚口は長方形と推定されるが、上半分が破壊されているため、確定はできない。

燃焼室　燃焼室は半円形で、焚口より低い位置にあり、炭が厚さ約5㎝堆積していた。また、炭を除去すると、浅い窪みになり、炭を掻きだした痕跡であることが判明した。

また、燃焼室と焼成室を区画する『障壁』は全く残存していなかった。

焼成室　焼成室は約20°の勾配を持ち、炎と火熱が上昇する様（昇焔窯）になっている。勾配の部分には、横からみて、二辺の長い直角三角形のような『畦』を4条、粘土で作り付け、その上の水平面に瓦を並べて窯焚きする構造となっている。各々の勾配の接点にあたる『峠』は削平されているが、『峠』の推定ラインから各畦の端部までの長さは1.1～1.15mほどある。燃焼室の畦や窯壁の立ち上がりの部分は赤く焼け締まったり、青灰色に還元して硬くなった状態になっており、窯の中の温度が相当上昇していたことを示している。

排水溝　窯の各長軸方向に沿って、幅10㎝、深さ5㎝の溝が検出されている。雨水等が窯内外に進入しないための排水溝と判断される。

灰原　各焚口の前には作業場所と灰原（以下、南西灰原と北東灰原と呼称）を兼ねた掘り窪められた空間が存在し、南西灰原には丸瓦と平瓦を用いて排水用の暗渠（SD01）を、北東

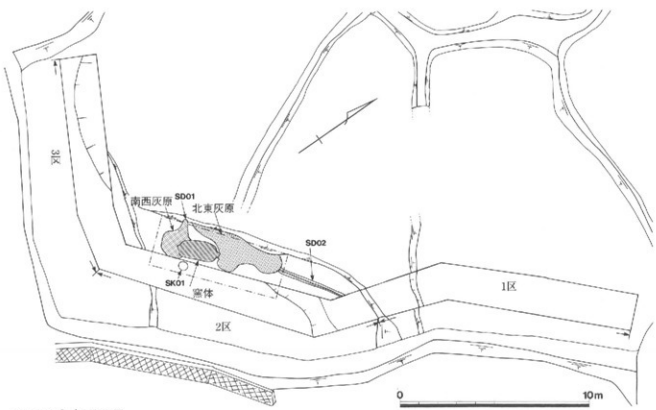


fig. 375　調査区平面図

灰原には、排水溝（ＳＤ02）、設けていることが判明した。また、北東灰原には瓦窯に接する様にして、長軸方向約1.9m、短軸方向約70cm、深さ15cmの楕円形の穴が発見され、瓦焼成時に焚口を塞ぐ粘土溜との御教示を得た。

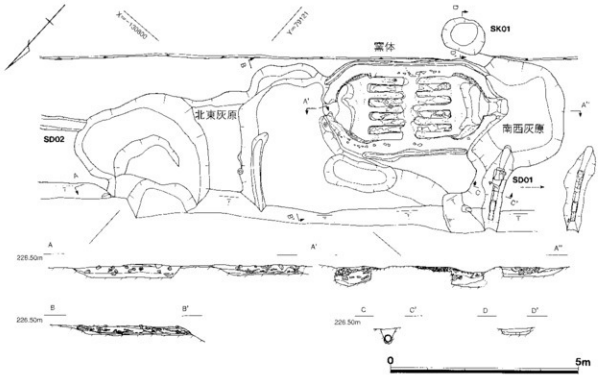
それぞれの窪みには、大量の炭、焼け損じた瓦、焼土、窯の壁片が投棄されていた。また、北東灰原は、２つの窪みからなり、窯からはなれた北東側の窪みには拳大の石が多く投棄され、瓦や炭等の出土は少なかった。なお、北東灰原から北東方向に検出長約７m、幅約30cm、深さ約３cm（堆積土は灰色シルト）の浅い溝が１条延びているが、瓦窯の付帯施設であるかは不明である。

遺構の配置状況からみて、窯の上半部には、長軸方向の南東側に製品の出し入れをする『窯口』があり、北西側に『窓』と呼ばれる穴があったとの御教示を得た。

ＳＫ01　２区で確認された直径約80cm、深さ約15cmの穴で、埋土は炭が大半を占めている。瓦を焼成後に残った炭を掻きだして入れておき、次回の着火時に使用する炭溜めの穴であるとの御教示を頂いた。

出土遺物　灰原や窯体内からは桟瓦、軒丸瓦、桟丸瓦、軒飾りの瓦、焜炉の底部分、土錘が出土している。最も出土量が多いのは桟瓦で、白灰色の胎土に、表面が銀灰色を呈し、焼成状態は良好である。また、直径約15cm、長さ約35cmの半裁された円筒形の焼粘土塊がいくつか出土した。これは『畦』の先端部が、火熱で崩れないように、保護するものである。

３　区　長さ約22m、幅４mの調査区である。現況耕作土の下に茶褐色シルト（床土）、灰色～灰褐色系シルト・粘質土（数層に分層可能、炭、焼けた木片、中世の土器を含む）が約30～50cm堆積し、その下の淡灰色砂質シルト（混礫）は無遺物層である。調査区は南から北に下がり、浅く広い窪みを呈する。付近の微地形を観察すると、浅い谷地形が北東から南西方向に延びており、その末端部が当調査区にあたっていることが判る。



ig.376　瓦窯および関連施設平面図・断面図

fig. 377
調査地遠景

3．ま と め

1区　1区では、中世～近世の耕作土下は、礫が主体となる層が堆積しており、八多川の氾濫原であったと判断される。

2区　2区および拡張部付近は、今回の調査地では一番高い部分に位置するが、中世～近世の耕作土下では、遺構が確認できなかった。しかし、現況の耕作土直下の床土面（茶褐色シルト）で、瓦窯址を検出した。窯の地上部の構造は消失しているが、その他の残りは良好で、粘土溜めや炭溜め、排水溝が遺存し、当時の窯の形状を示す良好な資料である。

2区拡張部瓦窯址

この瓦窯はいわゆる『達磨窯』と呼ばれる構造のものである。今回発見されたものは、①窯の長さが約4.6m（焚口から焚口の内法で約3.9m）あり、②『畦』が4条備わっていること、③焼成室の大きさが1.9×1.8m程度（約6.2尺×5.9尺）であり、『六六窯』とよばれる6尺四方の寸法基準に応じており、明治以後、焼成室が大きくなること、④出土した遺物の年代観等から、江戸時代末期～明治時代初頭頃の間に操業した窯と判断される。また、『達磨窯』の立地は、燻瓦を作るために、窯の焼成後の冷却を行いやすい比較的砂質っぽい水分の上がってくるような場所を選んで造ることが多いとのことであり、この窯も八多川のすぐ際に築かれていることから、その条件を満たしている。

当時の瓦作りは、窯のある周辺数ケ村の供給を行う、小規模なものが多く、瓦の流通は10km四方程度であることが多いとのことである。また窯の構造も小型で、この瓦窯では、一度に500～600枚程度の桟瓦の焼成が限界であると推定されるというご教示を得た。

3区　3区では、浅い谷状地形の末端部が確認され、周囲から流れ込んだ中世の遺物が焼けた木片と共に出土した。

土地利用の変遷　旧耕作土層からの出土遺物からみて、中世（おそらく鎌倉時代頃）から調査地付近の開発が始まり、八多川の氾濫原や浅い谷状地形を、徐々に埋積して水田化を進め、江戸時代には水田の安定化が完了したものと判断される。その後、江戸時代末～明治時代初頭に瓦窯が短期間、営まれ、放棄された後は復田化して、現在に至ったと判断される。

2．勝雄（かつお）遺跡　第4次調査

1．はじめに

淡河町勝雄地区は、淡河町の西端に位置し、西は三木市志染町、北は美嚢郡吉川町に接する地域である。加古川の一支流淡河川は八多町屏風付近を源として西に流れ、淡河町の谷平野を形成し、勝雄地区南西部にあたる谷の狭隘部で北流して志染川に合流する。勝雄遺跡は、この淡河川の中流域の右岸に位置し、淡河川の流域のなかで最も谷平野が発達した地域に占地している。今回の調査地は、比較的広い谷平野の北側に発達した河岸段丘の一部とその下にひろがる後背湿地部分である。この河岸段丘と後背湿地との比高差は約8mを計測する。

今回の調査地東部の自然堤防上には、鎌倉時代に勧請されたとされる淡河八幡神社が鎮座し、現在の社域となっている杜からは、室町時代の土師器皿・瓦片・須恵器片などが出土している。この淡河川右岸に発達した自然堤防上は現在の勝雄集落の主要部となっている。また、淡河川の対岸には鎌倉時代～戦国時代の淡河氏の居城である淡河城を望むことができる。

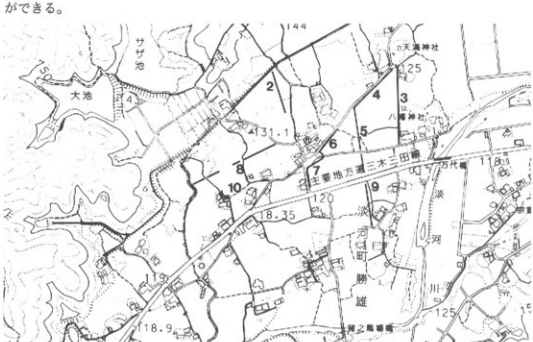


fig. 378
調査地位置図
1：10,000

2．調査の概要

第2～10調査区の9ヵ所の調査区域を設定し調査を実施した。

今回の調査地のうち、第3～7調査区は、第3次調査地の西に位置し、段丘斜面および段丘崖裾につづく低地部分を調査した。調査の結果、奈良時代の掘立柱建物、中世の掘立柱建物と奈良時代の溝などを検出した。従来、第3次調査などで飛鳥時代～中世の竪穴住居ないしは掘立柱建物を主体とする継続的な集落の存在が明かであったが、今回の調査では第3次調査地に近接する第4・5調査区の西部において遺構が集中して検出されたのに対して、第5調査区の西部、第7調査区など湯の山街道西側の低地では、遺構は散漫となっており、集落地が段丘崖裾及び段丘斜面に集落の中心があると推定される。

第8調査区は第2調査区の南東段丘上の調査区であり、中世の掘立柱建物1棟と粘土採

掘坑や弥生時代の竪穴住居の痕跡とも考えられる掘形を検出した。弥生時代の遺構は、第3次調査でも高位の段丘上で確認されており、散在的だが弥生時代後期には、勝雄地区に定住する人たちが居たことを裏付けている。

第9調査区は、東側は淡河川の自然堤防の西端にあたり、西側は低湿地となっている。遺構は自然堤防上に集中して弥生時代の溝や土坑、平安時代の溝を検出した。このことから、淡河川右岸自然堤防上には、弥生時代の墓域や平安時代から中世の集落が存在すると考えられる。

3．ま と め

今回の調査は、広範囲に渡っており遺構・遺物の密度も調査区ごとに異なっている。遺構が密集して検出された第5調査区では、奈良時代の掘立柱建物・溝などの遺構とともに鉄鉢型須恵器・薬壺などが出土しており、一般集落と異なる様相を呈している。

なお、詳細については平成11年度刊行の『勝雄遺跡Ⅰ　第1・2・3・4次発掘調査報告書』を参照されたい。

fig. 379
第5調査区

fig. 380
第8調査区

3．勝雄（かつお）遺跡　第5次調査

1．はじめに

今回の調査地は、平成10年4月～平成10年9月に実施した第4次調査地の南側、県道三木・三田線東側の低段丘及び段丘と自然堤防との間にひろがる後背湿地にあたる。

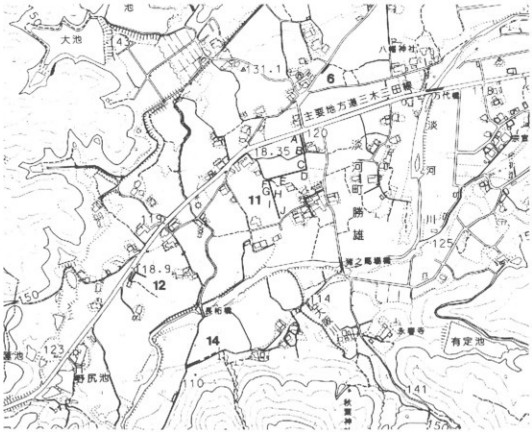


fig. 381
調査地位置図
1：10,000

2．調査の概要

本調査区は、4次調査のVI区の北側延長部分、全長24m、幅3mの調査である。

第6－N区

検出した遺構は、掘立柱建物1棟、土坑1基、溝1条、ピット9基である。大半のピットは、直径30～40cmの円形で、深さ40cm前後である。内1基には、直径30cmの柱材が遺存していた。全面に幅5cmほどの面取の痕跡が確認できる。ピットは包含層上層の茶褐灰色細砂まじりシルト層から切り込まれていたと考えられる。

第11区

第11調査区は、平成10年8月に実施した第7調査区の東、県道三木・三田線の南東側に拡がる河岸段丘、その緩斜面とさらに東側に展開する低地帯である。第11調査区は排水路工事実施に沿ってカギ形に調査坑を設定して調査実施した。A～Dトレンチは、低段丘面Eトレンチは段丘裾部の緩斜面に相当し、F・Gトレンチは段丘上、H～Jトレンチは低地帯にあたる。各トレンチで検出した遺構は、掘立柱建物4棟、柵列1条、溝2条、河道4条、土坑10基、性格不明の落ち込み1ヵ所を検出した。

SB01

Bトレンチ西部の南壁沿いで検出した掘立柱建物である。東西7m以上か、南へ展開する建物と考えられる。直径30cm前後の円形掘形で、深さ10cm前後を残存させている。柱間寸法は、西から2.2・2.2・2.5・2.0mで、東側の隅柱と推定される柱掘形は削平をうけ小型の浅い掘形となっている。

fig. 382　SB01

fig. 383　SB03

SB02　　SB02は、南北6.2m（3間）、東西2.8m（1間）以上の掘立柱建物である。南北の柱間寸法は2.1m等間隔、東西の柱間寸法は1.7mを計測する。柱掘形は、直径30cm前後の円形掘形で、直径20cm前後の柱痕跡を残している。

SB03　　SB03は南北4.0m（3間）以上、東西2.0m（1間）以上の掘立柱建物である。南北の柱間寸法は1.3m等間隔、東西の柱間寸法は2.0m等間隔である。柱掘形は、直径50～60cmの円形掘形で、深さは10～20cm前後残存させている。一部の柱掘形では直径20cm前後の柱痕跡が明瞭である。

SA01　　柱列の間隔は2.2m等間隔で3間分検出した。柱列の柱掘形は一辺50～60cm前後の隅丸方形で、掘形の深さは南側で検出した掘形で検出面から82cmを測り、北側の掘形で56cmを測る。特に最も南側で検出した掘形では柱材が良好に残存していた。残存する柱根は直径20cm前後、長さ100cm程度の丸太材である。

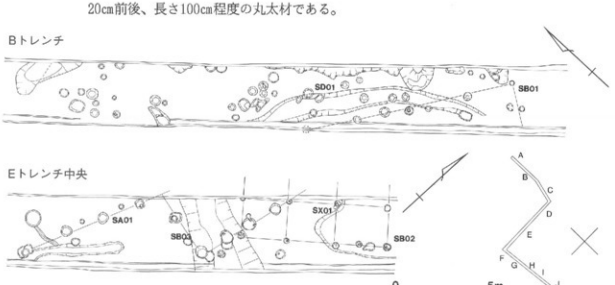


fig. 384　第11調査区平面図

fig. 385
調査区遠景

第12区　勝雄地区南西部、西部の丘陵から東にひろがる狭い河岸段丘の端に設定したＬ字形の調査区である。西に接して県道三木・三田線が通り、さらに西側の丘陵裾沿いに湯の山街道が残り、南に勝雄経塚のある三木市戸田にいたる峠を望むことができる。

検出した遺構は、Ｌ字形に周る溝１条、土坑１基、ピット10基、耕作溝４条である。

第13区　第13調査区の調査区域は南向きの段丘斜面で棚田となっており、各棚田について北から順にＡ～Ｇトレンチを設定した。

調査区は、北から南に緩やかに傾斜している。Ａトレンチ・Ｅトレンチでは、柱穴と考えられるピットを確認したほか、浅いピット数基、溝８条ほどが検出されている。

第14区　全長36ｍ、幅２ｍ前後の排水路部分の調査である。淡河川左岸の河岸段丘上に位置する調査区で、13区とともに、今年度の調査区の中でも最南端に位置する。

本調査区では遺構は確認できなかったが、１６世紀代頃の瓦・陶磁器などが出土した。勝雄地区の伝承によると、１６世紀代頃に本調査区の付近の山中に寺院が存在したことが伝えられている。今回の遺物がその存在の傍証となるものと考える。

第15区　第15調査区の調査区域は、第１次調査地の南100ｍに位置し、段丘斜面にあたる。調査は段丘平坦面にあたる部分をＡトレンチ、段丘下端部をＢトレンチとして調査を実施した。

Ａトレンチにおいて検出した遺構は土坑１基、柱穴20基である。

Ｂトレンチにおいて検出した遺構はピット５基、柱根を残す柱穴２基である。

３．ま と め

第６－Ｎ区では、大半の遺構が遺物包含層上に掘り込まれている。遺物包含層出土の遺物は、平安時代後半～鎌倉時代前半頃のものである。位置関係や時期関係からＳＸ01・ＳＤ01は、ＳＢ01に伴う炊事場の様な施設であったと考えられる。また先述した柱穴の柱材のように、箱木千年家にも共通する技法を使用した建物が存在したことが判明した。

第11調査区は、第４次調査地の南に位置し、概ね第４次調査地と同一の河岸段丘の斜面及び段丘崖裾につづく部分を調査した。調査の結果、古墳時代後期の掘立柱建物、中世の掘立柱建物と奈良時代の河道などを検出した。従来、第３次・第４次調査などで飛鳥時代

～中世の竪穴住居ないしは掘立柱建物を主体とする継続的な集落の存在が明らかであったが、今回の調査で古墳時代後期（6世紀後半）にまで集落の出現を遡らせる資料を得ることができた。

第12調査区は従来の調査地の南にあたるが、明確な遺構が希薄で、時期不明の竪穴住居の周壁溝状の遺構を検出したにすぎないが、当該遺構が竪穴住居の痕跡とすれば勝雄遺跡の中では古墳時代以前の居住地は散在的にあったと考えられる。

第13調査区の調査は、勝雄遺跡南端にあたり、遺跡の範囲を確定する調査であったが、段丘斜面の中腹で鎌倉時代前半に遡る柱穴や溝を検出した。調査が水路部分に限定されているため、建物など明確な遺構は検出できなかったが、街道の南側斜面沿いに集落の拡がりを想定できると考えられる。

第14調査区ははじめて淡河川左岸に設定した調査区である。調査の結果、淡河川によって形成された沼沢地状の湿地を検出したが、東側丘陵の沢から流れ込んだと考えられる瓦・陶磁器・土師器片がまとまって出土している。第14調査区の東側丘陵の尾根上には、安土時代に廃絶したと伝える「光泉寺」があり、これらの遺物は尾根上から鉄砲水などによって流れ込んだ可能性も考えられる。瓦のうち瓦当のあるものは、鎌倉時代の巴文瓦で、「光泉寺」が鎌倉時代には創建されていた山岳寺院であることを示すと考えられる。

第15調査区の調査では第1次調査と同様に、段丘上面で柱穴群を検出した。このことから、勝雄遺跡の中心部にあたる段丘上面においては相当な範囲にわたって中世段階に集落形成があったと考えられる。

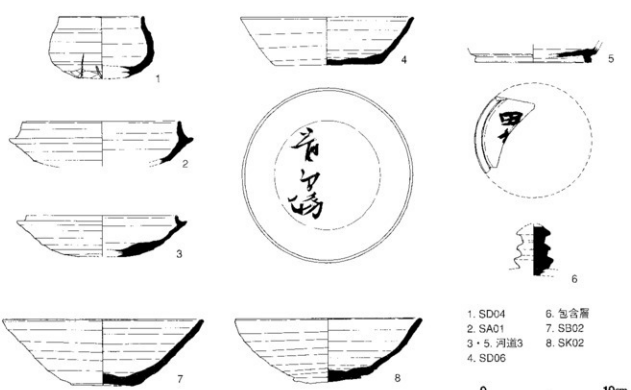


fig. 386　出土遺物実測図

4．木ノ元（きのもと）・経塚山（きょうづかやま）・西北（にしきた）・平井沢（ひらいさわ）遺跡

1．はじめに

神戸市北区淡河町の南僧尾地区に位置する、木ノ元遺跡・経塚山遺跡・西北遺跡・平井沢遺跡の各遺跡は、加古川水系である淡河川の一支流僧尾川の左岸に所在している。同地域はこれまで埋蔵文化財の存在があまりよく知られていなかった地域であるが、県営圃場整備事業に伴う試掘・本調査によって次第に埋蔵文化財の拡がりが確認されつつある。

淡河町南僧尾の一帯は細長い谷が複雑に入り組んだ起伏の激しい地形で、現在ではあまり見かけることができなくなった棚田が良好に遺存する。今回の発掘調査は圃場整備工事に伴うもので、調査段階では、南僧尾遺跡第１～７次調査として実施したが、遺跡の分布は立地的に見ても実際の調査成果を見ても尾根筋から緩斜面地上に散在するものであった。このため同地区内の遺跡を１つの遺跡として捉えることは適切ではないと判断し、平成11年度に実施した報告書作成段階において、調査地が存在する場所の字名をもとに新たに遺跡名とし、それぞれの遺跡毎に調査次数を数えて各々の調査を呼称した。

新旧遺跡名対照表

改称後の遺跡名・調査次数	改称前の遺跡名・調査次数	調査年度
鍛冶屋垣内遺跡第１次	南僧尾Ａ地点	昭和50年度
九田遺跡第１次	南僧尾Ｂ地点	昭和50年度
木ノ元遺跡第１次	南僧尾遺跡第１次	平成10年度
経塚山遺跡第１次	南僧尾遺跡第２次	平成10年度
木ノ元遺跡第２次	南僧尾遺跡第３次	平成10年度
西北遺跡第１次	南僧尾遺跡第４次	平成10・11年度
平井沢遺跡第１次	南僧尾遺跡第５次	平成10年度
平井沢遺跡第２次	南僧尾遺跡第６次	平成10・11年度
西北遺跡第２次	南僧尾遺跡第７次	平成11年度

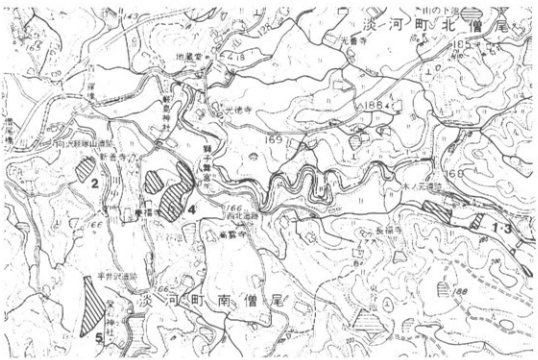


fig. 387
調査地位置図
1：10,000

2．調査の概要　平成10年度には木ノ元遺跡第１・２次、経塚山遺跡１次、西北遺跡第１次・平井沢遺跡第１・２次調査を実施した。なお、南僧尾地区内の各遺跡の調査については、既に平成11年度に報告書を刊行しているので、詳細はそちらに譲る。

木ノ元遺跡第１・２次　調査地は、僧尾川流域の最上流部、南僧尾地区のなかでも最奥部に位置し、南僧尾の中では最大の平地が拡がる地区である。

調査の結果、旧耕土層の下層で地山面を検出し、中世の遺構・遺物が少量確認された。Ｂ－２区やＤ区で溝を検出し、遺物もこの付近からの出土が多い。各調査区の成果から考えると、遺跡における集落の中心は、Ａ～Ｅ区とＦ～Ｊ区の間の未調査地に存在する可能性が高い。

経塚山遺跡　正神地区において実施した調査で、現況の２枚の田圃（Ａ区・Ｂ区）と経塚山と通称されている山林部分（Ｃ区）がその対象地である。

Ａ・Ｂ区　Ａ区については、遺構は確認されなかった。Ｂ区はここ数年前まで水田面を屋敷地として利用していたらしく、Ｃ区に近い地山削平部分では、屋敷地に伴う落ち込み等が確認された。南半部では地山面が傾斜しており、その傾斜面で溝や水溜遺構と考えられる土坑、その余水吐けと考えられる溝状遺構などが検出された。これらの遺構は時期の特定が難しく、中世末～近世の範囲内としか推定できない。

Ｃ区　経塚山と称される山林部分で、地山を削り出して平坦面をテラス状に造りだしており、頂上付近には土坑状の遺構が３基存在し、うち１基は焼成をうけている。頂上部の南側は磐座状に抉りとって下面をテラス状に成形し、祭壇のように整えられている。遺物については表土や流土中より中世～近世にかけてのものが出土しているが、頂上部の土坑状の遺構等からの出土はなく、また、経塚に係わる遺構・遺物も確認されていないことから、この山林部分の用途、時期については不明である。

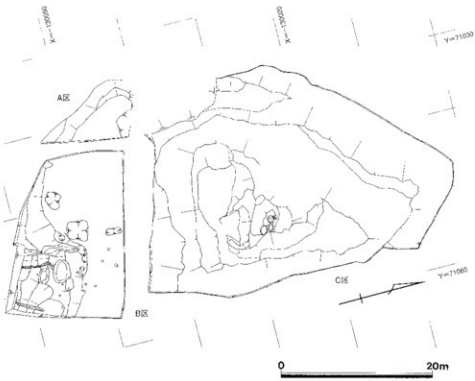


fig. 388
経塚山遺跡
調査区平面図

平井沢遺跡　第１・２次調査地はともに西面する丘陵斜面である。後述するように両調査地の間には小規模な谷が存在し、両調査地を同一の遺跡として捉えるべきかどうかについては検討の余地が残されており、今後の周辺地の調査結果をふまえて改めて検討したい。

fig. 389　平井沢遺跡遠景

第１次調査　第１次調査地は、平井沢遺跡の北半に位置する。現況は数枚の田圃に分かれており、この田圃の区画ごとにA～M区と呼称して調査を実施した。

A－１区　現耕土の下層に床土・旧耕土層を挟んで、地山土の黄灰色軟岩混じりのシルトを盛土している。その下層に旧耕土層が堆積しており、耕土上面から約90㎝で地山面を検出した。

近・現代の撹乱が多く存在したほか、等高線に直交するような幅20～80㎝の溝、ピット数基を確認した。溝は自然の水みちの可能性が高い。ピットについても、出土遺物がわずかで細片のため時期については明確ではない。

B～M区　現耕土の下層には、何枚かの旧耕土と地崩れ後の田圃面復旧のための地山土の盛土がみられ、その下層で地山面を検出した。G区やM区でピットを検出したが、ピットからの出土遺物はなく、上層からの出土遺物も細片のため明確な時期は不明である。層位などから判断すると近世あるいは近代のものである可能性が高い。

第２次調査（確認調査）　調査地は平井沢遺跡南半で、第１次調査地との間には西へ傾斜する小規模の谷が存在している。対象地は東西両側を規模の大きな谷に挟まれた西側に傾斜する緩斜面である。試掘調査では、中世から近世の遺物が出土したが遺構は検出できていないため、本調査を実施する以前に遺構の有無や密度、分布範囲を確認する調査を実施することとなった。

A～I区　長さ３～16m、幅１～３ｍのトレンチを計28本設定して調査を実施した。調査の結果、中世頃と考えられる溝・土坑・池・落ち込みを検出した。

fig. 390
平井沢遺跡
２次調査平面図

南僧尾城

調査区東隣の丘陵は、「南僧尾城」に想定されているが、従来詳細については不明であった。調査中に地元の方からも該当地が城跡であることを教えられたため、踏査を実施した。廓群・空堀・池・道状平坦面等の存在を確認した。

fig. 391　南僧尾城縄張図

3．ま と め

今回南僧尾地区において実施した調査では、各遺跡において遺構あるいは遺物が確認された。木ノ元遺跡では中世の遺構・遺物が、経塚山遺跡では祭壇状の地山整形遺構が検出され、平井沢遺跡では第1次調査においては遺構・遺物の拡がりは確認されなかったが、第2次では、中世頃と考えられる遺構を検出した。

経塚山遺跡第1次調査において検出した祭壇状の地山整形遺構は、遺構の時期や性格等を結論づける要素に乏しいが、経塚山遺跡における人為的な行動を裏付けるものである。C区の山林が地元において経塚山と呼称されることを重視すれば、経塚あるいはそれに関連する施設を築くために地山を整形したことが十分に考えられ、中世～近世において、この地が信仰の対象もしくは信仰の場とされていた可能性がある。

南僧尾地区における中世～近世への過渡期の遺跡の様相については今まで不明な点が多かったが、今回の調査によって、その一端が明らかとなった。南僧尾地区における本格的な調査は今回が初めてであり、未だ未解明の要素は数多く残されているものの、今回の調査で得られた成果の意義は大きいといえる。

fig. 392
南僧尾地区遠景

5．寒鳳遺跡　第３次調査

1．はじめに

寒鳳遺跡は、明石川と伊川の合流点の東側、伊川に面した標高19～23ｍの河岸段丘上に立地している。

現在のところ、西区伊川谷町潤和字寒鳳からイガミ畑周辺を中心とした南北約0.2㎞、東西約0.3㎞の範囲に分布していると考えられる。

当遺跡は、平成７年10月に、共同住宅建設工事に先立つ試掘調査によって発見された。

今回の調査は、玉津烏羽線（赤羽地区）街路築造工事に伴い、擁壁工事による工事影響範囲部分の発掘調査である。

fig. 393
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

今回の調査区は、第２次調査の南北の両側部分で、１～５区が北側、６～10区が南側にあたる。

調査区の基本層序は、調査区西側では、上から、暗灰色砂質土（耕土）層・暗黄灰褐色粘質土（床土）層・黄灰褐色砂礫土層・茶灰色シルト層・茶褐色シルト層・暗茶灰色シルト層となり、地表下0.6～1.0ｍ（標高22.0～22.3ｍ）で、遺物包含層である暗茶褐色シルト層に至る。暗茶褐色シルト層の下層が、淡褐色砂礫土層で、その上面が遺構面となっている。また、調査区東側では、上から、暗灰色砂質土（耕土）層・暗黄灰褐色粘質土（床土）層・暗茶灰色シルト層・淡褐色砂礫土層となっている。

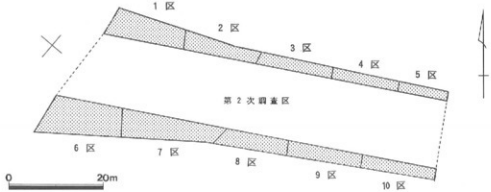


fig. 394
調査区設定図

fig. 395
10区全景

検出遺構　今回の調査で検出した遺構は、古墳時代後期の竪穴住居20棟・掘立柱建物３棟・大壁造り建物２棟・土坑２か所・溝状遺構５条・ピット126基等である。

１区～５区　１区～５区では、古墳時代後期の竪穴住居11棟・掘立柱建物２棟・土坑１か所・ピット94基を検出した。

６区～10区　６区～10区では、古墳時代後期の竪穴住居９棟・掘立柱建物１棟・大壁造り建物２か所・土坑１か所・溝状遺構５か所・ピット32基を検出した。

３．ま　と　め

今回の調査は、平成８年度の第２次調査区の隣接地であったため、第２次調査と同一の遺構がかなり検出された。

出土遺物の整理が未了であるため、検出遺構の詳細な時期については、明確でないが、第２次調査時と同様、概ね古墳時代後期（５世紀末～６世紀中頃）に属するものであると考えられる。

今後、出土遺物の整理が進むにつれ、詳細が判明していくであろう。

fig. 396　６～10区全景

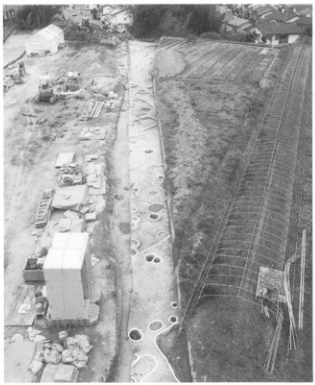


fig. 397　１～５区全景

6．栃木遺跡　第14次調査

1．はじめに

栃木遺跡は、明石川の支流、櫨谷川の中流域左岸の河岸段丘上にひろがる集落遺跡である。1994年度から菅野地区内における小部・明石線道路改良工事に伴う発掘調査を継続して実施している。栃木遺跡内では、土地改良事業に伴う発掘調査も実施され、弥生時代中期から中世に至る遺構・遺物を検出しており、多くの成果を得た。

fig. 398
調査地位置図
1：5,000

2．調査の概要

今回の調査地は、新たに土地取得の完了した部分２ヶ所である。字東下に位置する調査区を第１地区、字土井に位置する調査区を第２地区として調査をすすめた。

第１地区

第１地区の北側は平成９年度の第14次調査地から続く舌状の段丘の突端付近に位置し、後に詳述する石造品群を含む地区である。また南側は、平成８年度の第12次調査地に南接する地区である。

供養塔周辺

五輪塔２基を中心にわずかに高まりをもった部分で、小さな森状を呈する約40㎡あまりの範囲について先行して調査をおこなった。この２基の五輪塔は近接する住民によって供養されており、塔前には供養台が各々設置されている。腐食土を除去したところ、２基の五輪塔は部材も整っておらず、いずれも火輪と水輪のみで地輪に当たる部分は、別の石材で台にして

fig. 399　供養塔

いるような状態である。また、火輪・水輪とも当初の組み合わせの一部ではなく周辺に散在していたものを、適当な台を用意して載せたものと推測される。

腐食土およびその下層の黄色シルトはほぼフラットに堆積しており、塚状の盛土は確認されなかった。これらの土を除去すると、大量の近代の瓦片や陶磁器、土師質の燭台などとともに空・風輪1点、火輪2点、水輪1点、地輪1点が出土した。いずれの石材にも、刻銘や墨書は認められなかった。

出土した遺物は、古いものでも幕末～明治にかけてのもので、これらの石造品の年代を推定するのは困難であるが、石材の特徴から近世までは下らないものと思われ、中世後半ごろの所産ではなかろうかと考えられる。また、この石塔の位置する段丘も自然のものではなく近世における盛土であることが断ち割り調査の結果判明しており、当初これらの石塔がどのように存在していたのか不明である。

弥生時代遺構面　弥生時代中期の遺物包含層が残っているのは、「供養塔」周辺の下層部分のみで、その北側は後述の自然流路があり、南側は第12次調査同様耕土直下が地山面（遺構面）となっている。そのため、遺構についても南側では削平されているものと考えられ、攪乱も多く比較的深い遺構のみが検出されている状態である。以下、遺構の種類毎にみていきたい。

土坑　土坑中からは、比較的まとまって遺物が出土しているものもある。なおこれら土坑のうち、ＳＫ11は第12次調査のＳＫ02にあたる。いずれも弥生時代中期のものである。

検出土坑一覧表

	形　態	規　模	深さ		形　態	規　模	深さ
ＳＫ01	溝状	215× 60	20	ＳＫ07	楕円形	90× 50	15
ＳＫ02	楕円形	80× 45	20	ＳＫ08	楕円形	95× 70	25
ＳＫ03	楕円形	75× 45	25	ＳＫ09	円形	105× 80	45
ＳＫ04	楕円形	95× 55	10	ＳＫ10	楕円形	60～× 55	24
ＳＫ05	楕円形	100× 55	6	ＳＫ11	円形	径90	28
ＳＫ06	溝状	110× 40	10	ＳＫ12	楕円形	90× 70	50

（数値単位：cm）

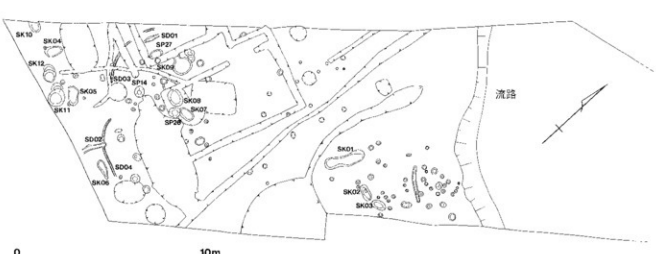


fig. 400　第1地区平面図

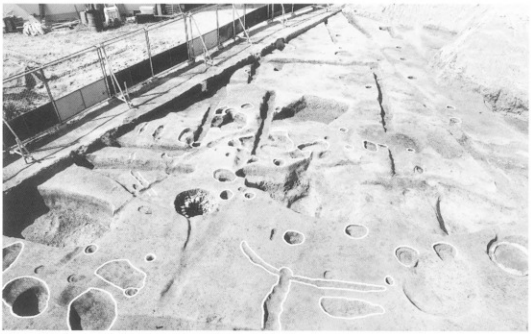


fig. 401
弥生時代遺構面

溝　調査区南端付近で４条の溝を検出した。このうちＳＤ03とＳＤ04は円弧状に形成されており、竪穴住居の周壁溝になる可能性がある。特にＳＤ03を周壁溝とみた場合ＳＰ14・26・27は支柱穴と推定することができる。またＳＤ02はＳＤ04を周壁溝とする竪穴住居に伴う排水溝となる可能性がある。

ピット　ピットは調査区全体に散在しているが、建物を成すような柱列は認められなかった。

自然流路　調査区北３分の１部分は自然流路となっている。南側の肩部のみが検出されているだけで規模は不明である。流路内上層から弥生時代中期の遺物が出土している。本調査区の東方の第７次調査において弥生時代中期の自然流路が検出されており、これも谷口川の旧河道であったと考えられる。

第２地区　第２地区は、南側に東西に連なる丘陵から、櫨谷川に向かって派生する谷が、平野部に出る部分に位置している。

基本層序　第２地区における基本層序は東側と西側では変化があり、地形的には、西側は緩やかに落ち込み、湿地状の堆積を呈している。顕著な遺構は東側で検出された。

現地表から55cm前後までは数枚の旧耕土層であり、数度にわたる水田造成が行われたものと推定される。この下層に遺構面を構成する淡黄褐色極細砂層、及び黄灰色粗砂層が存在するが、遺物包含層は存在しなかった。これより、下層は砂層とシルト層の交互堆積で、流水に伴う堆積層であった。現地表から70cm～１ｍに暗黒灰色粘質土層が存在していることから、一時的に滞水を伴う湿地状の状況を呈していることが推定される。

検出遺構　調査の結果、多数の鋤溝、および溝数条、土坑４基、ピット数基を検出した。

ＳＤ01　北東から南西方向へ延びる幅70㎝前後、深さは検出面から10～20㎝の溝である。微細な土師器片数点が出土している。

ＳＤ02　北東から南西方向へ延びる幅１～1.5ｍ、深さは検出面から７㎝前後の溝で中央をＳＤ01によって切られており、南西側については不明である。遺物の出土はなかった。

ＳＤ03　北東から南西方向へ延びる幅20～40㎝、深さは検出面から５㎝前後の溝である。遺物の

出土はなかった。

SK01　径60～80cm以上、深さは検出面から10cmの土坑で、東側は調査区外へと続く、西側をSD03に切られている。遺物の出土はなかった。

SK02　直径90cm以上、深さは検出面から20cmの土坑で、大半をSD01、SD02によって切られている。遺物の出土はなかった。

SK03　直径40cm以上、深さは検出面から15cmの土坑で、北側は調査区外へと続く、遺物の出土はなかった。

SK04　長さ30cm以上、幅15cm、深さは検出面から17cmの土坑で、北側は調査区外へと続く、遺物の出土はなかった。

ピット　計5基のピットを検出したが、建物等を構成するものを確認することはできなかった。

3．ま と め

第1地区では、弥生時代中期後半の遺構と、中世後半の石造品、近世末～明治時代頃の井戸が確認された。近世以降の整地により南半部は削平され遺存状況は悪いものの、多数の土坑や竪穴住居の可能性のある遺構などが検出されており弥生時代中期後半の集落の存在を伺わせる。

先述のとおり「供養塔」は当初からこの位置にあったものではなく、近世末以降にこの地で石材が組み合わされ手厚く祀られたようである。

第2地区では、溝など耕作に伴うものと推定される遺構については、調査区内の全域で検出されたが、ピット等の遺構については東側にのみ検出された。遺構面の土壌についても東側の方が安定している。今回の調査地の西側に隣接する部分で平成6年度に実施された発掘調査では、東側は自然河川状の谷状地形が、確認されており、今回の調査地はこの谷の東側の、谷にむかって下降する緩斜面地と推定される。今回、検出された遺構については、遺物が微細なため、詳細は不明であるが、遺構面上からの出土遺物、埋土の状況から概ね中世の時期が考えられ、耕溝に関しては、近世期のものと推定される。第1地区で検出された弥生時代の遺構・遺物は、第2地区においては、確認されなかった。

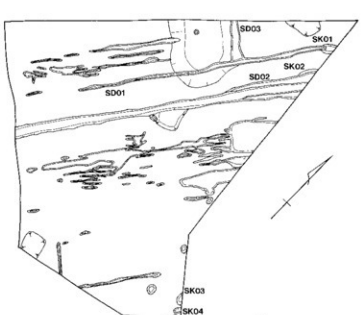


fig. 402
第2地区平面図

7．栃木（とちのき）遺跡　第15次調査

1．はじめに

明石川の支流、櫨谷川流域には多くの遺跡が存在しているが、中流域左岸に形成された河岸段丘上に立地する栃木遺跡もその一つである。過去の調査では弥生時代～中世の遺構・遺物が確認されている。周辺には栃木遺跡と同様の立地条件をもつ長谷遺跡・菅野遺跡・西神62地点遺跡・松木遺跡などの遺跡のほか、西神65地点遺跡や如意寺裏山遺跡・城ケ谷遺跡などの弥生時代中期～後期の高地性集落が展開している。

今回の調査地は栃木遺跡の推定範囲のほぼ中央、櫨谷川のさらに支流である谷口川との合流点に近い南側の段丘上に位置している。谷口川が形成した開析谷の奥部には天台寺院である如意寺があり、中世後期には多くの塔頭が存在したと推定されている。谷の入口にあたる当調査地周辺でも今までに中世の遺構が検出されている。

北東に隣接する第７次調査では計３面の遺構面が確認され、弥生時代中期の土坑、溝、柱穴、流路が検出された。また出土遺物の中には瀬戸内東部地方の特徴をもつ土器が含まれている。

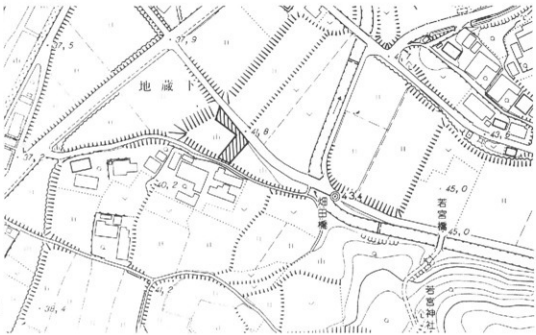


fig. 403
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

基本的に第７次調査と同様の土層堆積が確認されたが、先の調査では確認されなかった遺構面が新たに検出され、４面の遺構面が確認された。

第１遺構面　溝３条、土坑１基、落ち込み２基、柱穴１基を検出した。

ＳＤ01　幅約60㎝、深さ20㎝を測る。埋土は灰黄色極細砂で、中世の須恵器片が１点出土した。

ＳＤ02　最大幅80㎝、深さ20㎝を測る。２ｍほどが検出されたが、北側で浅い窪みとなり消える。埋土は灰黄色極細砂で、遺物は出土していない。

ＳＤ03　幅50㎝、深さ30㎝を測る。先の調査で検出した部分を合わせると長さ約13ｍほどが確認できた。弥生時代中期の遺構と考えられていたが、溝の底部から弥生時代後期の鉢形土器の他、甕などが出土しており、幅があるようである。

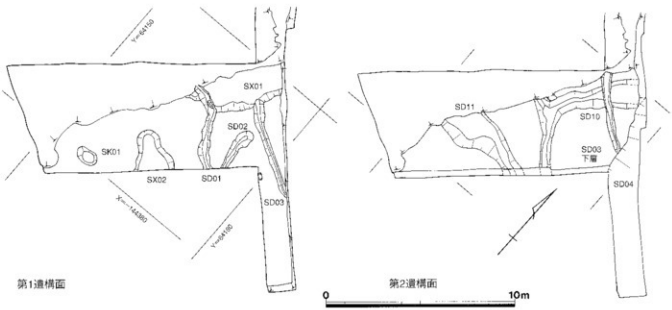


fig. 404　第１・２遺構面平面図

ＳＸ01　検出長約５ｍを測る落ち込みである。深さは30㎝ほどが遺存しており、底面から弥生時代後期の壺・甕が出土している。この他、埋土最上層から古墳時代後期の須恵器杯身が１点出土しているが、須恵器を含む層は浅く窪み状に堆積した上層の残りであった可能性も高い。

ＳＸ02　検出長約2.5ｍ、最大幅2.2ｍを測る落ち込みである。西肩に貼り付く形で弥生時代後期の土器が出土したが、いずれも細片である。

ＳＫ01　長径1.3ｍ、深さ60㎝の楕円形を呈する土坑である。埋土上層には炭が堆積する。遺物は出土していない。

第２遺構面　先の第１遺構面に相当する。溝２条を検出した。

ＳＤ10　最大幅1.5ｍ、深さ約20㎝を測る。溝の中程で分岐し、一方は直交して北に延びる。弥生時代後期後半の甕の底部片の他、器高12㎝の弥生時代終末期の小型壺が出土している。

ＳＫ11　最大幅2.2ｍを測る浅い溝である。後述するＳＤ09の最終埋土に相当するものと考えられる。弥生時代後期の土器が出土しているが、いずれも細片である。

第３遺構面　先の第２遺構面に相当する。流路２条、土坑１基、溝４条を検出した。

ＳＤ04　Ａトレンチ中央とＣトレンチの２ケ所で検出された。南からの流れが第７次調査区内で屈曲し、西へと流れを変えている。検出された流路幅はＡ・Ｃトレンチとも約５ｍである。Ａトレンチ検出部の北肩から弥生時代中期の甕が出土している。

ＳＤ09　Ｂトレンチの西端で検出された。調査区外に続くため全体の規模は不明である。調査区内では工事影響レベルの関係から検出幅３ｍ、深さ1.2ｍまでの掘削で終えている。埋土中層の灰黄色細砂層から弥生時代中期の甕・高杯などが出土している。ＳＤ09は谷口川の旧流にあたり、ＳＤ04はここから派生し、再び本流へと戻る流れであったと考えられる。

ＳＫ02　Ａトレンチ ＳＤ04の南で検出された。一辺約１ｍの方形を呈する土坑であるが、遺物は出土していない。

溝　ＳＤ07・08はともに幅30㎝、深さ約10㎝を測る小規模な溝である。埋土はいずれも灰色

シルトで、遺物は全く出土していない。

またＳＤ05・06は後述する第４遺構面検出の溝の最終埋土と考えられる。それぞれＳＤ12・04の流れの一部に相当し、ともに弥生時代中期の土器が出土している。

第４遺構面

先の第３遺構面に相当する。溝４条、土坑９基、柱穴、流路２条を検出した。

溝

ＳＤ12は幅60cm～１m、深さ20～30cmを測る。検出部分の中央で土坑を２基検出した。土層観察の結果、土坑は溝がある程度埋没した段階で掘削されていることが判明した。溝の埋土中から弥生時代中期の甕などが出土している。

ＳＤ13は幅40cm、深さ20cmを測るＬ字形の溝である。ＳＤ12と同時期に存在したものと考えられる。出土遺物はいずれも細片である。

ＳＤ15・16はともに幅60cm、深さ20cmを測る溝である。ＳＤ15から弥生時代中期の土器が比較的まとまって出土しているがいずれも細片である。

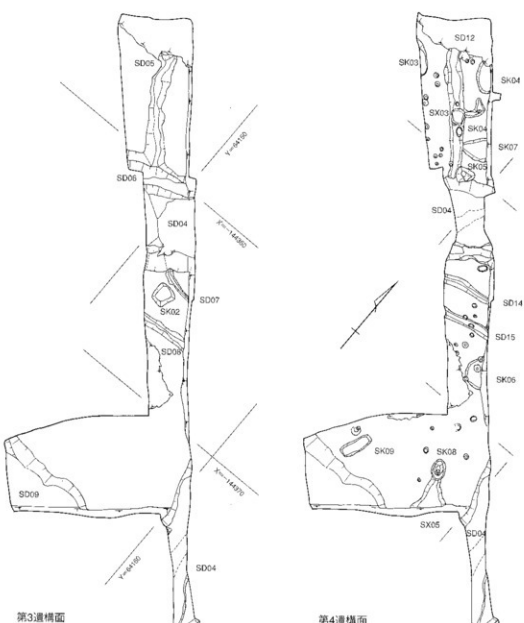


fig. 405
第３・４遺構面平面図

土　坑　ＳＤ12内で検出した２基の土坑について記述を行う。

ＳＸ03は長辺90㎝、短辺60㎝を測る平面長方形を呈する土坑である。ＳＤ12が僅かに埋没した段階で掘削されたようであるが、当初から長方形のプランが意識されていたかは明らかではない。底から破砕された甕が出土している。

ＳＸ04は長径50㎝、短径30㎝の楕円形の土坑である。ＳＸ03と異なり、ＳＤ12が完全に埋没した段階で掘削を行っている。土器埋納遺構で、口縁部を横に向けた甕が出土している。弥生時代中期後半の遺構である。

その他に検出した土坑は以下の通りである。

第４遺構面
検出土坑一覧表

	規　模　（ ）内は検出長	平面形	時　期
ＳＫ03	長径５ｍ、（短径30㎝）、深さ20㎝	長楕円形	弥生時代中期
ＳＫ04	長径1.8ｍ、（短径70㎝）、深さ10㎝	楕円形	出土遺物なし
ＳＫ05	径１ｍ、深さ40㎝	円形	弥生時代中期
ＳＫ06	長径1.2ｍ、（短径80㎝）、深さ20㎝	隅丸方形	弥生時代中期
ＳＫ07	長径1.4ｍ、（短径1.2ｍ）、深さ10㎝	不定形	弥生時代中期
ＳＫ08	長径1.2ｍ、　短径80㎝、深さ10㎝	楕円形	弥生時代中期
ＳＫ09	長辺1.6ｍ、　短辺60㎝、深さ10㎝	長方形	弥生時代中期
ＳＸ05	最大幅２ｍ、最大深40㎝	溝状	出土遺物なし

柱　穴　Ａ・Ｂトレンチで約40基の柱穴を検出したが、建物等には復元できなかった。柱穴掘形はいずれも円形で、径約30㎝のものが大半を占める。柱穴からの遺物の出土は少なかった。

３．ま　と　め　今回の調査でも第７次調査に引き続き、弥生時代中期の遺構・遺物が確認された。第４遺構面は比較的遺構の密度は高かったが、ＳＤ04・09の２本の流路の貫流により、第２・３遺構面と時期が下がるにつれて検出される遺構が減り、この地の使用頻度は低下していった状況が見受けられた。弥生時代後期の遺構面が確認されたことから周辺の高位の段丘上に居住域を移したものとも考えられるが、周辺での状況が明らかになるのを待ちたい。

fig. 406　第４遺構面全景

8．玉津田中遺跡平野地区　第15次調査

1．はじめに

玉津田中遺跡平野地区は、明石川中流域左岸の完新世段丘面及び氾濫原に位置する縄文時代～中世の複合遺跡である。平成元～6年度の圃場整備事業に伴う調査や平成5～9年度の道路築造工事（宮前田中線築造工事）に伴う調査などにおいて、弥生時代前期～中世の集落の一部が確認され、断続的ではあるが、弥生時代以降連綿と営まれていた大集落遺跡であることが明らかになった。

今回の調査は、平成5年度以降計画的に実施してきた宮前田中線築造工事に伴うもので、弥生時代中期の水田、弥生時代後期～古墳時代前期の集落や流路、中世の遺構などが確認された。

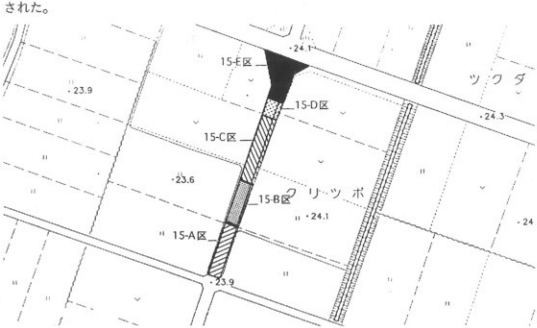


fig. 407
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

宮前田中線築造工事に伴う発掘調査の成果については、平成5年度調査から今回の調査までのものを『玉津田中遺跡発掘調査報告書（第8・10・12・13・15次調査）』にまとめて平成11年度に刊行した。ただし、この中で15次調査（今回の調査）の成果概要については、資料整理が途中であったため、完全な報告を行っていない。ここでは報告書に掲載できなかった資料の中からいくつかをピックアップして概説を行うこととする。

今回の調査では4面の遺構面が確認された。上層より第1遺構面は古墳時代後期～中世の集落、第2遺構面は弥生時代後期～古墳時代前期の集落、第3遺構面は弥生時代中期～弥生時代後期の水田、第4遺構面は弥生時代中期の水田である。その中で、最も遺構、遺物が多く確認されたのは第2遺構面で、ここでは第2遺構面における成果にしぼって、報告書に未掲載の資料を中心に報告を行いたい。

第2遺構面の遺構

第2遺構面は弥生時代後期～古墳時代前期の遺構面にあたり、調査地区の中ほどより北側で遺構が確認された。竪穴住居11棟をはじめ、土坑、溝、落ち込み、流路などが検出されている。時期の判明する遺構は、概ね弥生時代後期後半～布留併行期初頭にあたるが、庄内併行期に該当する遺構が多い。

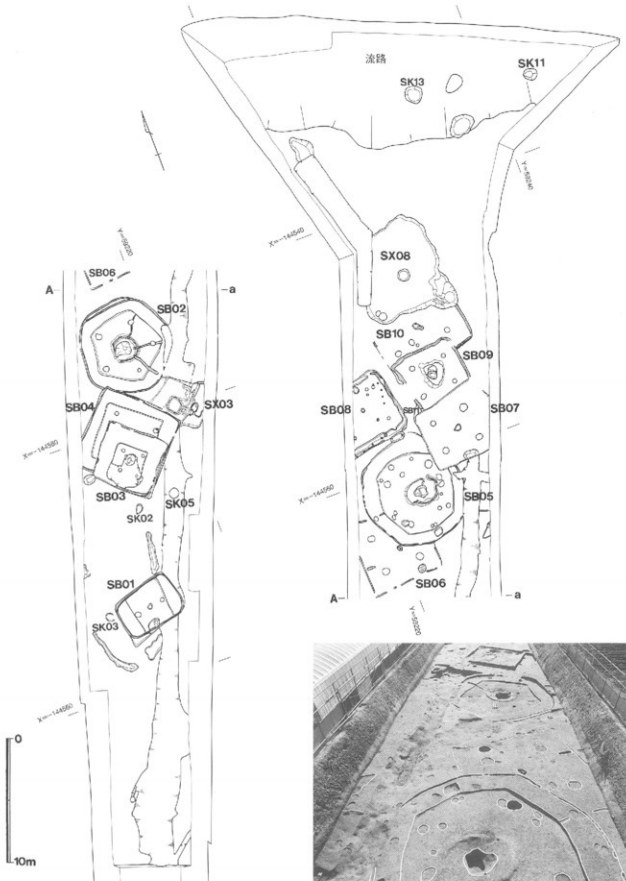


fig. 408　第 2 遺構面平面図

fig. 409　中央部第 2 遺構面

第2遺構面の遺物　流路の上層より布留併行期初頭の遺物が大量に出土しており、量としては同期のものが多いが、流路以外の遺構からの出土は、弥生時代後期後半～庄内併行期のものが中心である。

SK05の遺物　ＳＫ05は径80cm、深さが検出面より95cmを測る平面形が円形で、断面形が袋状を呈する土坑である。遺物はほとんどが底付近でまとまって出土している。

2～5が二重口縁壺、6～8が甕にあたる。1は体部のみの残存であるため、器種の特定は難しいが、外面の粗いハケやプロポーションから台付甕の可能性も考えられ、また、2や5の口縁部の形状などとも合わせてみてみると、東海色の感じられる遺物と受けとめられる。6は器壁が薄く、体部が球形状で、外面に細かいタタキが施されており、いわゆる庄内甕にあたるものと考えられる。7、8は体部がほぼ球形状で、内面にケズリを施して器壁を薄く仕上げているため、プロポーションは庄内甕とあまり差異はないが、体部外面を基本的にハケを用いて調整しており、布留式甕に先行する形態とされている布留系甕あるいは布留式傾向甕に属するものと考えられる。

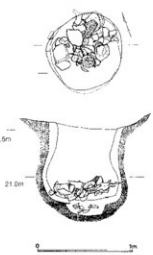


fig. 410　ＳＫ05平面図・立面図

これらの遺物は同一土坑からの一括出土であるため、庄内併行期から布留併行期への過渡期にあたる良好な資料と言えよう。4、6、7、8以外は、他地域の影響をうけたものの可能性があるが、胎土を肉眼観察するかぎり、在地のものとほとんど差異がなく、搬入とは言い難く、模倣あるいは影響をうけたと考えた方が現在のところ妥当である。

SX08の遺物　ＳＸ08は不整形の落ち込み状遺構で、庄内併行期～布留併行期初頭の遺物が出土しているが、その中で、報告書に掲載した『淡路型器台』と称される淡路地域でよくみられる特異な器台が出土している。

9、10は口縁部にキザミ（タタキ？）を施したタイプで、近年提唱されている『淡路型甕』の範疇に入れることのできる器種である。これで淡路型器台と甕が同時に出土したことになり、淡路地域以外では初めてである。11は在地の形態である。いずれも、庄内併行期に属する遺物と考えられる。

その他の遺構の遺物　竪穴住居（ＳＢ01～ＳＢ11）などからの出土も多いが、今回の調査においては、調査区の北端部で確認された流路の肩部から、廃棄されたようなかたちで、弥生時代後期後半～布留併行期初頭にあたる大量の遺物が出土しており、その大半が庄内併行期終末～布留併行期初頭の土器類である。その中には、他地域から搬入されたものや影響を受けたものも含まれており、たいへん興味深い。

3．まとめにかえて

今回の調査における特に遺構に関するまとめは、『玉津田中遺跡発掘調査報告書（第8・10・12・13・15次調査）』にて詳細に記しているので、そちらを参照されたい。また、遺物に関しては、まだまだ整理ができていないものが多く、完全な報告を行うまでには、しばらく時間がかかりそうなのが現状である。また、機会を作って追加報告を行っていきたい。

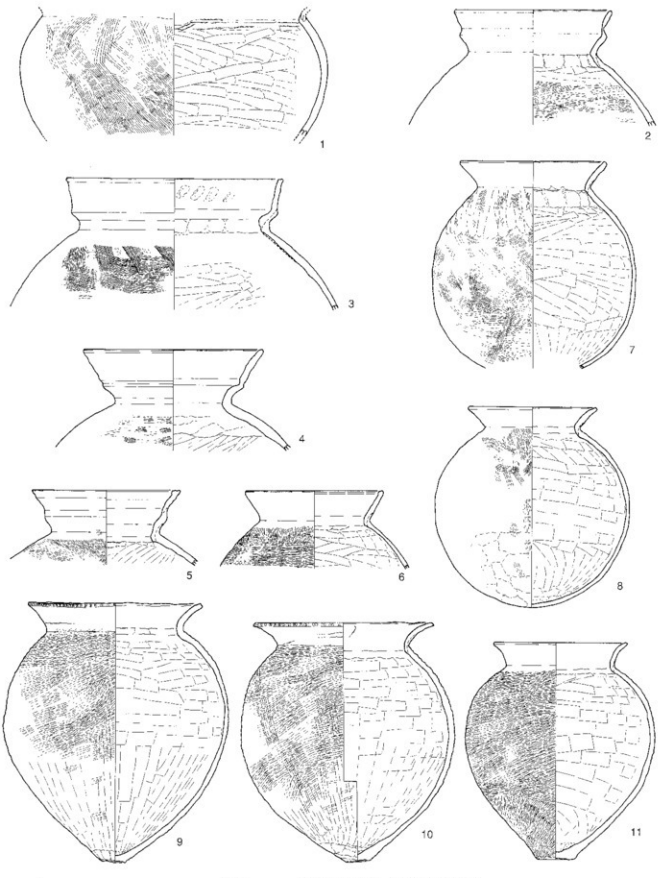


fig. 411　出土遺物実測図

Ⅳ. 保存科学調査・作業の概要

本年度も遺物と遺構の保存と活用を計るために、保存科学による調査と作業を継続して行っている。しかし、震災の影響で発掘調査そのものがより緊急性の高いものになり、調査件数の増加に伴い、保存処理を必要とする遺物の出土量も増加している。そのために、昨年度と同様に、大半は応急的な劣化防止の処置を行い、とりあえず仮保管せざるを得ない状況になっている。

1．遺構の保存科学

土層の転写

発掘調査現場で観察できる土層の断面や平面を、図面や写真による記録だけでなく、特殊な合成樹脂を用いて、その表面だけを剥がし取る土層転写の手法を用いて遺構の保存を行っている。

住吉宮町遺跡31次

慶長の大地震によって発生した地層のずれが確認された。その痕跡を保存するために断面の転写を行った。土層は六甲山南麓特有の花崗岩の風化土壌で、粗砂を主体としており、接着強度をさほど必要としなかったため、硬化時間の速い変性ウレタン系合成樹脂を用いた。転写範囲は縦1.4m、横2.5mと、縦0.8m、横1.8mである。転写後、余分な土壌を水洗で取り除き、木製パネルにエポキシ系合成樹脂で接着し固定している。

兵庫津遺跡15次

近世の数度の火災と整地の痕跡が、発掘調査によって確認された。調査区の断面でも明瞭にその痕跡が認められたため、記録の手段として、あるいは将来の展示など活用を目的として、その断面の転写を行った。1カ所は、現在の地表面から中世の遺構面までで幅1.4m高さ3.0m、もう1カ所は近世の焼土面を一軒分の幅5.4mで高さ0.6mの範囲であった。いずれも土器や瓦、焼土を多量に含んだ土層であるため、その重量に耐えるために、強度において勝るエポキシ系合成樹脂を転写用樹脂として用いた。

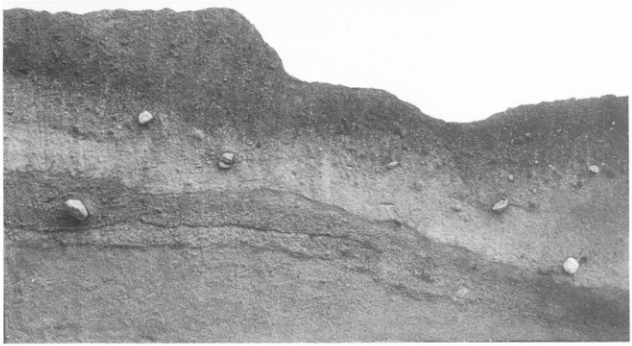


fig. 412　住吉宮町遺跡31次調査　地滑り断面土層転写

fig. 413
住吉宮町31次
ガーゼ貼り作業

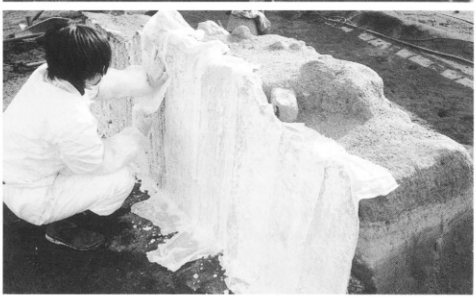


fig. 414
住吉宮町31次
剝がし作業

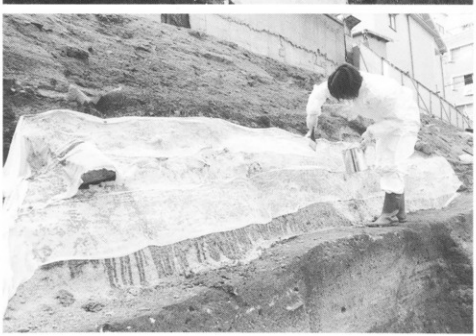


fig. 415
兵庫津15次
樹脂塗布作業

2．遺物の保存科学

脆弱遺物の取り上げ

出土遺物の中で、素手で取り上げることができないほどに、劣化が進行している出土遺物のことを脆弱遺物と呼んでいる。その材質は多岐に及び、土器や石製品、金属製品などの無機質遺物や、人骨、獣骨、木製品、種子などの有機質遺物もある。特に有機質遺物には脆弱になってしまったものが多い。これらをできるだけその形を壊さないように、室内に持ち込み、後の保存処理が容易にできるように、保存科学の手法を用いて現地で取り上げを行った。その手法は遺構の切り取り工法を援用した部分もある。

兵庫津遺跡15・17次

近世の焼土面から様々な炭化した木製品が出土した。これらは火災により、炭化したことによって分解しにくくなり、辛うじて土の中でその形を保っていたものである。被災したことを如実に物語る遺物ではあるが、本来の強度はすでになく、触れるだけで欠けて崩れる状態になっていた。これらを壊れないように取り上げるために、発泡ウレタン樹脂で梱包して取り上げて室内に持ち込み、保存処理を行った。

fig. 416　兵庫津15次　炭化材取り上げ（周囲を少し掘り下げる）

fig. 417　同　（発泡ウレタンで梱包する）

fig. 418　同　（ひっくり返した裏側の状態）

fig. 419　同　（再度ひっくり返しシリコン樹脂で固定）

方法としては、まず遺物の周囲を少しだけ掘り下げ、遺物が崩れない程度にその下の土を抉る。次に遺物に発泡ウレタン樹脂が接着しないように、紙やアルミ箔を遺物に馴染ませる。そして遺物の上とその周囲に発泡ウレタン樹脂を吹きつける。樹脂の硬化後、その下にスコップを差し込み、一気にひっくり返す。場合によっては、ひっくり返す前に、竹串やへらを差し込んで、下部の土壌を切り離しておく。この手法により、15次調査では炭化米、折敷、横槌、下駄、畳、筵、17次調査では緡銭、土鍬と網などを取り上げた。

取り上げ後は、室内に持ち込み、裏側の土を取り除き、水やアルコールでクリーニングを行い、十分に乾燥させてからアクリル系合成樹脂をしみ込ませ、強化を図った。強化する事によって、手で持つことができるようになったものもあるが、なお、全体としての形状の維持が困難なものについては、エポキシ樹脂やシリコン樹脂で遺物の形状に添ったベースを作製し、収納箱にベースごと収めている。

住吉宮町遺跡では、鉄刀を同様の方法で取り上げた。

fig. 420　兵庫津遺跡15次　土錘と網

fig. 421　兵庫津遺跡15次　火災により炭化した草鞋

fig. 422　兵庫津遺跡15次　火災により炭化した畳

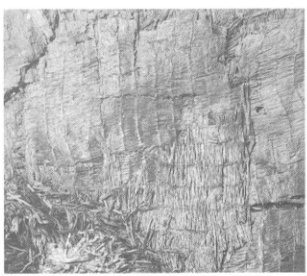


fig. 423　同左　拡大

金属器

まだ整理の途中であるが、今年度の調査のうち55件の調査で金属器が出土している。（別表）時期は古墳時代から近世まで様々である。兵庫津遺跡出土金属器は点数が膨大であるため総てを終えていないが、これ以外のものについては全点エックス線透過像による観察と記録を終えている。

特筆すべき遺物としては、二宮遺跡で発見された飛鳥時代の鍛冶工房に関係する金属器や金属片、鉱滓である。この時期の金属加工関連遺跡はまだ余り知られておらず、重要な資料となる。製作段階で生じる金属片や鉱滓の認定について、エックス線透過像によって判断している。

エックス線透過像の利用として、木製品に内包する金属器の検出を、奈良国立文化財研究所の協力を得て行った。対象としたのは、二葉町遺跡出土の舟材である。井戸枠に転用されていたため本来の用途が確定しにくかったが、軟エックス線透過撮影の結果、鉄製の釘や補修痕が多数検出され、準構造舟であったことが確定した。

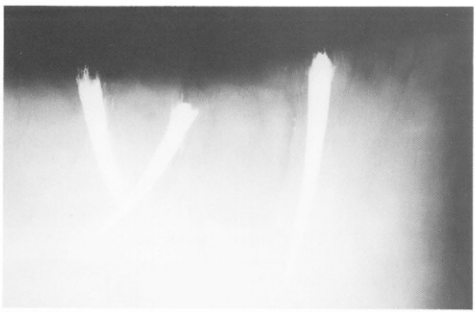


fig. 424
二葉町遺跡
舟材X線透過像

舟材（クスノキ）の中に鉄釘が残っているのがわかる
55kV p　4mA
2min30sec

fig. 425
兵庫津17次
緡銭（寛永通寶）

孔の中に僅かに麻紐の断片が残っていた

木製品

本年度も継続してポリエチレングリコール（ＰＥＧ）含浸法と真空凍結乾燥法によって木製品の保存処理を行っている。真空凍結乾燥法の前処理は、ＰＥＧ水溶液50～60％含浸で行っている。試験的には、高級アルコール法などの処理方法を各種の遺物などで行っている。

二葉町遺跡出土の舟材は、ポリエチレングリコールを２段階に分けて含浸する方法で、約３年間の予定で保存処理を行う計画をたてた。まず初めに、加熱や脱水過程での変形を防止するために、舟材全体を内型と外型に分けてエポキシ系樹脂とガラスクロスで何層にも覆い、補強のためにステンレスの丸棒でさらに補強を行った。内型には含浸液の侵入を計るために数カ所の穴を開けている。含浸は、当初分子量約200のポリエチレングリコールからはじめ、途中から分子量約4000のものに換える予定である。

fig. 426　二葉町遺跡　近世桶含浸準備

fig. 427　二葉町遺跡　舟材

fig. 428　二葉町遺跡　舟材

遺跡名	遺物名	点数
魚崎郷古酒蔵群１次	銅銭、キセル、銅飾金具、銅釉、鉄銭、鉄釘、鉄製品	137
魚崎郷古酒蔵群２次	銅銭、キセル、鉄釘	24
岡本北３次	鉄釘	1
郡家大蔵７次	キセル、鉄鏃、鉄製品	4
住吉宮町３１次	銅銭、鉄鏃、鉄刀、鉄斧、鉄鏃、鉄釘、鉄製品、鉱滓、炉壁、鞴の羽口	57
住吉宮町３３次	鉄釘	1
本庄町４次	銅銭、鉱滓	2
本山３０次	鉄釘	1
本山３１次	銅銭、鉄釘	4
本山３２次	鉄製品、鉱滓	2
本山３４次	鉄釘	2
篠原１７次－２	鉄製品	4
都賀１０次	銅銭	1
都賀１１次	銅銭、鉄釘	21
都賀１２次	銅銭	2
二宮１次	銅銭、垂帯（巡方）、耳環、鉄鎌、Ｕ字型鍛先、鉄鏃、刀鞘の羽口、敲打滓、他	210
勝雄４次	銅銭、鉄製品、鉱滓	6
勝雄５次	銅銭、銅製品、鉄釘、鉄製品	6
極楽寺３次	銅製品、鉄釘、鉄製品、他	81
南郷尾１次	銅柄頭、鉄釘	3
南郷尾３次	鉄製品	1
南郷尾４次	鉄釘、鉄製品、鉱滓	17
湯山４次	鉄釘	1
祇園７次	小型鉄斧、鉄釘、鉄製品	4
兵庫津１５次	銅杓子、銅釘、銅製品、鉄製品、他多数	１万点以上？
兵庫津１７次	銅銭、銅釘、キセル、銅製品、鉄刀、鉄釘、鉄製品、鉱滓、炉壁	312
兵庫津１８次	銅銭、銅片、銅針金、鉄釘	5
塚本３次	銅銭、鉄釘	2
上沢１９次	銅銭、鉄釘	4
上沢２０次	銅銭、鉄釘、鉄製品、鉱滓	7
上沢２１次	鏡	1
上沢２２次	鉄釘	1
上沢２４次	鋳造鉄斧	1
上沢２５次	鉄釘、鉄製品	2
上沢２７次	鉄製品	1
上沢２８次	鉄鏃、刀子、鉄製品、鉱滓	10
長田神社境内１２次	銅銭、鉄鏃	2
二葉町７次－３	銅銭、銅製品、鉄釘、鉱滓	21
二葉町７次－４	鉄刀、鉄斧、鉄釘、鉱滓、他	44
松野７次	銅鏃、鉄鏃、鉄釘、鉱滓、他	17
御蔵６次－１	鉄製品	1
御蔵６次－２	鉄釘	1
御蔵８次－１	鉄釘	2
御蔵１７次	鉄釘	1
御蔵１８次	鉄釘	1
御船４次	銅銭、鉄釘、鉄製品	4
大田町１１次	銅帯金具、鉄製品	2
天神町２次	銅銭、鉄釘	10
今津１２次	鉄製品	2
寒風３次	鉄製品	1
寒風４次	銅銭、鉄製品	2
白水７次	鉄鏃	1
玉津田中１５次	銅鏃、鉄製品、鉱滓	7
山合３９次	銅耳環、鉄製品	2
日輪寺６次	鉄製品	1

平成10年度　出土金属器一覧表

遺跡名	遺物名	点数
住吉宮町３１次	漆椀、井戸枠（桶）、桶タガ、他	4～
勝雄４次	柱材、杭根	3
勝雄５次	漆器片、曲物底板、栓？、柱材	6
兵庫津１５次	炭化物（下駄、草鞋、籠、椀、折、盆、編み物、麦）	21
兵庫津１７次	炭化物（網）	2
上沢２０次	木簡、下駄、椀、曲物、井戸枠材、他	28
二葉町７次－３	漆椀、横櫛、箸、木釘、曲物、楔、井戸枠、桟木、杭、板材、割材、角材、半丸材	141
二葉町７次－４	木棺材、階段用材、井戸枠、杭、板材、他	140
松野７次	杵、下駄、槽、折敷底板、丸柄、斧柄？未製品、柱材？、杭、角材、板材、割材、他	50
御蔵９次	板材、梯子	2
御蔵１０次	梯子	1
御蔵１６次	板材、炭化材	2
御蔵１８次	曲物、刀子削片、手斧削片、柄、板材、他	23
御船４次	杭、加工木	4
若松町２次	杭、柱根、木口板	7
神楽１１次	杭	1
大田町１１次	杭	5
天神町２次	木簡、木札、曲物（桶）、桶タガ	6
今津１２次	柱材	2
白水７次	柱材	3
玉津田中１５次	木簡、木包丁、鋤、鍬、刀状未製品、曲物、柱根、礎盤、杭、板材、割材、丸木、他	135
出合３９次	柱材、杭	4
出合４０次	柱材、板材	11

平成10年度　出土木製品一覧表

	花粉分析	種子同定	プラントオパール分析	樹種同定
上沢遺跡３次・２８次	○			
大田町遺跡１２次	○	○	○	○
若松町遺跡１次	○		○	
松野遺跡４～７次	○	○		○
二葉遺跡３～７次				○

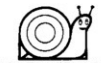
平成10年度　委託自然科学調査

平成10年度　神戸市埋蔵文化財年報

頒価1,600円

平成13年3月　印刷
平成13年3月　発行
発　行　神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL　078（322）5799
印　刷　㈲アロエ印刷
神戸市中央区古湊通1丁目1-5-301号
TEL　078（371）3831

神戸市広報印刷物登録・平成12年度　第311号（広報印刷物規格　A－6類）



本書は、再生紙を使用しています。